「バルガス・リョサ委員会」と先住民のその後
―ウチュラハイ事件の裁判とオーラル・ヒストリー

細谷広美

一．はじめに

本稿はペルーの紛争（一九八〇―二〇〇〇）の初期段階で起こったウチュラハイ事件の分析を通じて、紛争及びポスト紛争社会における間文化的（インターカルチュラル）関係を論ずる。ウチュラハイ事件は、一九八三年一月二十六日にペルーアンデスの山岳部に位置する先住民言語ケチュア語話者のウチュラハイ村で、取材途中の八名の記者たちが殺害された事件である。事件が起こった際、政府軍及び政府は、記者たちを殺害したのはウチュラハイ村の農民＝先住民たちであると発表した。しかし、記者たちを殺害したのは政府軍ではないかと考えた市民による、事件の真相究明を求める大規模なデモが首都リマで起こった。これを受けて、ベラウンデ・テリー大統領は、後にノーベル文学賞を受賞（二〇一〇年）するバルガス・リョサを委員長とする「ウチュラハイ事件調査委員会」（Comisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay）、通称「バルガス・リョサ委員会」を組織した。調査委員会は、記者たちを殺害したのは村人たちであると結論づける報告書を提出した（*Informe de la Comisión Investigadora de los sucesos de Uchuraccay*）。すでにラテンアメリカ文学の「ブーム」の作家の一人として国際的名声が高かったバルガス・リョサは、事件をめぐる文章をニューヨーク・タイムズ紙にも掲載している（**写真1**）。日本ではウチュラハイ事件をめぐるバルガス・リョサの文章は、集英社ギャラリー［世界の文学］十九『ラテンアメリカ』に収録されている（リョサ 1990）。

ウチュラハイ事件は、ペルーの紛争、すなわち「恐怖の時代（manchay tiempo）」に関する国家の集合的記憶において重要な部分を構成してきた。ウチュラハイ事件で亡くなった記者たちは「殉職者」として扱われ、毎年事件が起こった一月二十六日の前後にマスメディアで特集が組まれる。加えて事件が起こった日には、ウチュラハイ村に遺族及び記者たちが集まり式典が開催される。記者たちが殺害された場所には十字架がたてられ（**写真2**）、中央広場には平和を表す鳩のモニュメントが建立され、村の入り口に記念公園が建設されている（**写真3**）。八名の記者が「殉教」したウチュラハイ事件は、ペルーのジャーナリズムにおいて、真実を追求するジャーナリズム魂の表れとして、記者たちに

よる英雄的行為として顕彰、記憶されてきた（**写真4**）。ウチュラハイ事件はペルー真実和解委員会（Comisión de la Verdad y Reconciliación）の最終報告書（Informe Final 2003）においても重要な位置を占めており、これまでウチュラハイ事件に関する多くの文章が書かれ、書籍が出版されてきている。[i] 一方で、誰が記者たちを殺害したのか、政府軍なのか村人なのかという事件の真相をめぐっては、現在にいたるまで議論が続いてきており、二〇一〇年に米州人権裁判所に提訴されている。

本稿ではウチュラハイ事件が起こった背景とペルーの紛争について概観した後、事件後に逮捕され裁判を経て服役したウチュラハイ村の元村長のオーラル・ヒストリーの提示とその分析をする。そして、ウチュラハイ事件をめぐるケチュア語世界とスペイン語世界の関係について検討する。これらを通じて、公的歴史と公的歴史に組み込まれない記憶や歴史の関係性を明らかにし、多民族、多文化のポスト紛争社会における課題を考察する。

ウチュラハイ村は事件後、反政府組織と政府軍の攻撃を受け廃墟となった。村が再建されたのは、フジモリ政権がおこなった国内避難民の帰還支援を通じてであった。筆者は二〇〇二年からウチュラハイ村の人々、ウチュラハイ村からの国内避難民、亡くなられた記者の遺族、および関係者へのインタビュー調査を続けてきた。元村長へのインタビューは、刑を終えた元村長が、再建されたウチュラハイ村に戻っていた際の二〇〇四年に数回に分けてケチュア語でおこなっている。

作業はケチュア語によるインタビューをテープ起こしし、それをスペイン語に翻訳し、さらに日本語に翻訳するという手順をとっている。インタビュー及び録音のテープ起こし、ケチュア語からスペイン語への翻訳にあたってはケチュア語とスペイン語のバイリンガルの調査助手、ケチュア語教員の方たちにご協力いただいた。ケチュア語は村や地域によって多様であるため、ケチュア語からスペイン語への翻訳にあたっては専門家と何度もやりとりをし、訳をめぐって議論を繰り返した。

元村長が語るオーラル・ヒストリーは、農地改革前の時代から事件が起こるまでの村の歴史、そして元村長の裁判について、これらの時代を生きた当事者の視点から語られた貴重な資料となっている。しかし、関係者が存命であることから、これまで筆者は公開することを躊躇してきた。が、二〇一五年に、ペルーのジャーナリストのサンチェス（Sanchez）兄弟による『ウチュラハイ：徒歩で来た者は命を落とすであろう村（*Uchuraccay: El pueblo donde morirán los que llegaban a pie*）』が出版され、筆者が書くことをためらってきた二名の非先住民女性の反政府組織との関係が同書でふれられ、現地で公の議論の場におかれることになったことから公刊することにした。事件を直接経験した村人たちが高齢化し、すでに故人となった方々もいること、加えて現在新型コロナウイルスがペルーで猛威をふるっていることも背景にある。ただし、ウチュラハイ事件調査委員会報告書、真実和解委員会最終報告書、サンチェス兄弟による著書等では実名で書かれている名前を本稿では一部仮名としている。

ウチュラハイ村の元村長の語りは、アンデスの一先住民によるオーラル・ヒストリーを通じて、非先住民の世界と先住民の世界、スペイン語とケチュア語という異なる言語世界が、それぞれ独自の世界を構成しつつも、時に重なり影響し合ってきたこと、それが紛争、裁判、ポスト紛争社会という特定のコンテクストにおいて、互いにどのように関わることになったかということを表している。さらに、アンデスの農村で生まれ育ったケチュア語話者の先住民が、農地改革や紛争、そして裁判をどのように経験したかということを、アンデスの一先住民／農民の視点から明らかにする。オーラル・ヒストリーという言葉を使用しているが、ここでの語りはいわゆる「正史（official history）」としての歴史を構成するにいたっていない。本稿は、先住民の人々の経験、記憶がなぜ公的歴史を構成するに至らなかったのかという問いへの回答を含んでいる。

アンデスの先住民のライフヒストリーを描いたものとしては、クスコ出身の文化人類学者リカルド・バルデラマ[ii]とカルメン・エスカランテ夫妻による『グレゴリオ・コンドリ・ママニ（Gregorio Condori Mamani）』がある（Valderrama & Escalane 1979）。このバイオグラフィーは、アンデス研究における金字塔となってきた。バルデラマ教授は若かりし頃、「バルガス・リョサ委員会」がウチュラハイ村に調査に行く際に、後に文化大臣となった文化人類学者のファン・オシオ博士や著名な歴史学者兼文化人類学者のルイス・ミリョネス博士とともに同行し通訳を務めている。バルデラマ教授にウチュラハイ事件について伺おうとしたことがあるが、当時はまだ第二次アラン・ガルシア政権下（2006-2011）であったため、事件の調査についてお話を伺うことはかなわなかった。

紛争と直接かかわるケチュア語話者のライフヒストリーとしては、ルルヒオ・ガビラン（Lurgio Gavilán）による『*Memoria de un soldado desconocido*』（無名兵士の記憶）、『*Carta al teniente Shogun*』（「将軍」[iii]への手紙）がある。ガビランは十二才から少年兵として、最初はセンデロ・ルミノソと共に戦い、後に政府軍のもとで戦った後教会で学んだ。その後メキシコのイベロアメリカ大学で人類学を学び、現在はペルーアヤクチョ市にある国立サンクリストバル・デ・ワマンガ大学で教鞭をとる文化人類学者として活躍している。『無名兵士の記憶』（邦訳未定）は様々な言語に翻訳されており、イベロアメリカ大学でガビランとともに学んだメキシコ在住の文化人類学者、黒宮亜紀氏による邦訳がまもなく出版される予定である。また、センデロ・ルミノソのメンバーであった両親のもとに生まれたホセ・カルロス・アグエロ（José Carlos Agüero）が、その半生を書いた『*Los rendidos: Sobre el don de perdonar*』（降伏：赦しの賜物）も出版されている。アグエロは、現在歴史学者、小説家として活躍している。

元村長によるオーラル・ヒストリーを掲載するにあたって、本稿では元村長へのインタビューの日本語訳をゴシックで上段に、インタビューをめぐる文化的翻訳（注釈）を下段に記すという試みをしている。

二．ペルーの紛争とウチュラハイ事件の背景

ペルー共和国は中央アンデスに位置する。人口は約三二、五一〇四五三人（2019年、世銀）、国土面積は約百二十九万平方キロメートルで日本の約三、四倍に相当する。スペインによる植民地支配を経たことで主たる宗教はカトリック教である。人口構成は先住民四五％、混血三七％、欧州系一五％、アフリカ系、中国系、日系を含むその他三％で、ラテンアメリカのなかでも先住民人口の割合が高い。先住民は数のうえではむしろ多数派である。

広大な領域をその支配下においていたインカ帝国の中心であったクスコは、ペルーに位置する。メソアメリカのアステカ王国に次いで、インカ帝国を滅ぼしたことが、スペインが南アメリカで勢力を拡大する契機となった。約三百年にわたるスペインによる植民地支配の後、一八二一年に独立を果たしている。しかし、独立が新大陸生まれのヨーロッパ系の人々であるクリオーリョたちを中心に実行されたことから、植民地時代に形成された人種間のヒエラルキー関係は温存されることになった。現在も数のうえでは少数派であるヨーロッパ系の人々が、社会のなかでエリート層を構成している。先住民の多くは「農民」となり、人種と貧富の差が密接に関係する著しい格差社会を構成している。

ペルーの紛争は、毛沢東系の反政府組織「ペルー共産党―輝ける道（センデロ・ルミノソ）」（Partido Comunista del Perú-Sendero Luminoso、以下センデロ・ルミノソと記す）が、一九八〇年に武装闘争を開始したことによって始まっている。反政府組織センデロ・ルミノソのリーダー、アビマエル・グスマン・レイノソは、山岳部アンデス地域に位置するアヤクチョ県の県都アヤクチョ市にある国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学の哲学教授であった。ペルー国内は首都リマを中心とする海岸部と、先住民人口が多い山岳部、熱帯雨林地域に大きく分かれており、山岳部に位置するアヤクチョ県は、国内でも最も貧しい県の一つである。リーダーが元大学教授であったことから、センデロ・ルミノソのメンバーの中核は、大学教員、学生をはじめとする都市のメスティソ（*mestizo*）[iv]であった。センデロ・ルミノソは、中国革命を実施した毛沢東に倣い、「農村部から都市を囲む」という戦略をとった。そして、山岳部で武装闘争を開始し、山岳部の都市へと勢力を拡大し、最終的に太平洋岸に面した海岸部に位置し国家の中枢である首都リマを制圧することを目指した。しかし、センデロ・ルミノソが武装闘争を開始した山岳部の農村地域は、ケチュア語をはじめとする先住民言語を話す人々が居住する先住民地域でもあった。ペルーでは「ペルー革命」を実施したベラスコ軍事政権下で、「インディオ（*indio*）」という言葉を差別的であるとし、「インディオ」は「先住民（*indígena*）」ではなく「農民」（*campesino*）となっていたのである。

センデロ・ルミノソの武装蜂起は、アヤクチョ県のケチュア語話者の村、チュスチ村ではじめられた。チュスチ村は、文化人類学的にはセンデロ・ルミノソの武装蜂起前に調査したアメリカの文化人類学者ビージェ・ジーン・イズベル（Bille Jean Isbell）の民族誌で知られる（Isbell

1985（1978）。その民族誌のなかでも移住者たちの存在と「ペルー革命」の影響による政治組織の変化の一端が伺える。当初、センデロ・ルミノソのコア・メンバーと彼らが武装闘争を開始した村の人々の間には、メスティソと先住民という相違が存在していた。しかし、センデロ・ルミノソがプロパガンダをおこない、革命学校への参加を強制し、一方で恐怖によって人々を支配することで、村落内にもセンデロ・ルミノソに加わる人々が現れ、反センデロ・ルミノソの人々との間に対立が生まれた。こうして武装闘争は先住民の人々をも巻き込むことになり、村落内及び村落間の争いへと発展した。さらに、一九八三年後半に、政府が非常事態宣言地域に政府軍を派遣することを決定すると、反政府軍、政府軍双方による先住民地域での大規模な殺戮がはじまった。

その後、政権はベラウンデ大統領（一九八〇―一九八五）からアラン・ガルシア大統領（一九八五―一九九〇）へと移った。この間、センデロ・ルミノソの勢力は拡大していき、他方で別の反政府組織「トゥパック・アマル革命運動」（*Movimiento Revolucionario Tupac Amaru :MRTA*）も蜂起した。「トゥパック・アマル革命運動」は、日本では一九九六年に日本大使公邸占拠事件を起こしたことで知られる。センデロ・ルミノソは一九八八年に首都リマに到達したことを宣言した。一方、一九九〇年の大統領選では、最有力候補とされていたバルガス・リョサを打ち破り、「ツナミ」のようにあらわれた日系人のアルベルト・フジモリが大統領に当選した。他方で一九九二年に入ると、サン・イシドロ区やミラ・フローレス区など、首都のなかでも国内のエリート層が居住する地区でセンデロ・ルミノソによる車爆弾を用いた本格的なテロ攻撃がはじまった。[v]

こうしたなか、フジモリ大統領は一九九二年四月に無血の自主クーデター（*auto-golpe*）を敢行した。これは国際的に民主主義に反する行為とみなされ国民投票がおこなわれたが、国民の過半数が大統領を支持した。しかし、その後フジモリ政権が権威主義的で反民主的政権とみなされる端緒となった。さらに政権が長期化するなか、テロ鎮圧過程での人権侵害が問題視されるようになっていった。フジモリ大統領は、それまで二期までとされていた大統領の任期を、憲法改正をすることで三期連続を可能にした。が、三期目がはじまった直後の二〇〇〇年に国家情報局の顧問モンテシノスの汚職のビデオが公開され、フジモリ自身も明確な理由を伝えないまま突然辞任し日本に逃亡した。この時、本来大統領には禁じられており、隠してきた日本との二重国籍[vi]を明らかにしている。

フジモリの日本への逃亡の後を引き継いだパニアグア暫定政権は、暴力の時代に起こったことを調査する真実委員会の設置を決め、続くアレハンドロ・トレド政権下の二〇〇一年に「真実和解委員会」の名称で正式に調査活動がはじめられた。二〇〇三年八月二十八日に提出された真実和解委員会の最終報告書は、一九八〇年から二〇〇〇年までの死者及び行方不明者は六九二八〇人であったと推計している。その原因については五十四％がセンデロ・ルミノソによるもの、三十七％が政府軍、警察組織などの国家機関により、残りはもう一つ

の反政府組織トゥパック・アマル革命運動や判明しなかったケースによるものとされた。さらに死者及び行方不明者のうち、七十五％が先住民言語を母語とする人々であり、紛争の被害は先住民の間で、最も過酷であったことが明らかになった。また、センデロ・ルミノソが武装闘争を開始したアヤクチョ県の死者及び行方不明者は全体の四十％以上を占めていた。真実和解委員会の報告書提出時、ベラウンデ元大統領は故人となっていた。フジモリ元大統領は、恩赦法が無効となった後刑事裁判を通じて二十五年の禁錮刑に処された。ガルシア大統領は再選（二〇〇六年～二〇一一年）したが、二〇一九年に汚職容疑で逮捕される直前にピストル自殺をしている。

三．ウチュラハイ事件

ウチュラハイ事件は、ベラウンデ大統領が一九八二年後半に非常事態宣言地域へ政府軍を派遣することを決定してからほどなくして起こっている。当時海軍は、ウチュラハイ村が位置するワンタ郡の中心の街ワンタのスタジアムに基地を建設する準備を進めていた。事件に先立つ一九八三年一月二十三日に、アヤクチョ県ワンタ郡のケチュア語話者のワイチャオ村で、村人たちが七名のセンデロ・ルミノソのメンバーを殺害したというニュースが流れた。非常事態宣言地域の政府軍のトップとベラウンデ大統領は、ワイチャオ村の村人の行為を称賛した。しかし、国内の左翼系の人々は事件を政府もしくは政府軍による捏造と考えた。貧しい農民のために闘っているセンデロ・ルミノソが農民たちに危害を加えるはずはなく、実際には政府軍がセンデロ・ルミノソのメンバーたちを殺害したにもかかわらず、先住民（農民）によるとすることで、先住民（農民）とセンデロ・ルミノソが反目しているとするプロパガンダに利用しようとしているのではないかと考えたのである。当時ペルーの左翼系の人々は、センデロ・ルミノソをキューバ革命の時代からの反政府ゲリラ[vii]のイメージでとらえる傾向があった。殺害されたセンデロ・ルミノソのメンバーのなかに、ワンタで行方不明になった中学生が含まれていたことも疑惑を強めた。

こうしたなか、異なる新聞社、雑誌社に所属する八名の記者たちが、真相を明らかにするためグループを組み一九八三年一月二十六日の早朝にワイチャオ村へと向かった。ワイチャオ村へ向かった八名の記者は、「オイガ誌」のアマドール・ガルシア、「エル・オブセルバドール誌」のウィリー・レットとホルヘ・ルイス＝メンディビル、「ラ・レウブリカ紙」のホルヘ・セダノ、「エル・ディアリオ・デ・マルカ紙」のエドゥアルド・デ・ラ・ピニエーリャ、ペドロ・サンチェス、フェリックス・ガビラン、「ノティシア紙」のオクタビオ・インファンテであった。案内役を務めたのは、ワイチャオ村近隣の出身で、アヤクチョ市で新聞を発行していたインファンテであった（**写真5**）。

一行は、早朝にタクシーでアヤクチョ市を出発し、アヤクチョ市から約四十七キロメートルのヤナオルコ（山）があるトクト湖の近くまで行き、そこで降りた後徒歩で山道を登った。途中、チャカバンバにあるインファテの母の家で短時間休んだ。そこで、ラバと馬を借り、

インフアンテの異父弟であるフアン・アルグメドが案内役として付き添った。

しかしながら、八名が予定通りにアヤクチョ市に戻らなかったため、アヤクチョ市に残った仲間の記者が当局に報告した。一方で、息子たちを含む一行が帰ってこないことを心配していた母のもとに、一月二十七日の朝ウチュラハイ村での殺害の知らせが届いた。知らせを受けた母、妹、アルグメドの妻は急いでウチュラハイ村に向かった。しかし、ウチュラハイ村に着くと村人たちに捕らえられ監禁された。翌日解放されると、タンボに行き通報した。他方で、ウチュラハイ村の村人たちはワンタに行き、センデロ・ルミノソたちを殺害したという報告をした。こうして当局が現場に行き、記者たちが殺害されていることを確認した。

これを受け、当局と記者たちはアヤクチョ市からヘリコプターで現場に向かい、ウチュラハイ村で八名の記者たちが殺害されたという事件が大々的に報道されることとなった。一方、ワイチャオ村で起こったことの真相を明らかにするために現地に赴いた記者たちが殺害されたことで、左翼系の人々や人権団体の疑惑はますます高まった。この結果、首都リマで真相究明を求める大規模なデモが実行された。こうした動きを受け、ベラウンデ大統領は国際的に著名な文学者バルガス・リョサを委員長とする「ウチュラハイ事件調査委員会」、通称「バルガス・リョサ委員会」を設置した。委員会の調査報告書は、八名の記者たちを殺害したのはウチュラハイ村の村人たちであったと結論づけた。しかし、記者たちを殺害したのは政府軍ではないかという疑惑は現在にいたるまで続いてきている。

それまで存在すら知られていなかったアンデス山中の小さな村の名は、この事件を通じて世界的に有名となった。事件後、三名の村人が逮捕され、アヤクチョ市及び首都リマでおこなわれた裁判を経て、有罪判決が下された。しかし、その間、ウチュラハイ村は、センデロ・ルミノソ、政府軍双方の攻撃により村人の虐殺がおこなわれたことで、村自体が消滅してしまった。当時ワンタ郡の高地のいくつもの先住民村が廃墟となっている。生き残った村人たちは国内避難民となり、近隣村、ウチュラハイ村が位置するワンタ郡の中心の街ワンタ、熱帯雨林地域（セルバ）、アヤクチョ市、首都リマ等に逃げのびた。紛争が拡大するなかで各地を転々とし、逃げのびた先で命を落とす村人も少なくなかった。

ウチュラハイ村の人々はまた、記者たちを殺害した野蛮な人々とみなされる差別にも直面した。「ウチュラハイ村の村人」という言葉は、アヤクチョ市では先住民を罵倒するときの侮蔑語となった。スティグマは時には生命の危険すらともなった。このため、ウチュラハイ村の人々は避難先で自らの出身地を偽って暮すことを余儀なくされた。

一九九二年九月にセンデロ・ルミノソのカリスマ的リーダーであるグスマンが逮捕されると、紛争は徐々に鎮静化していった。こうしたなか、フジモリ大統領は国内避難民が出身村へ帰還することを支援する「再定住化支援国家計画（PAR：Programa Nacional de Apoyo a la

Repoblación）」を実施した。これにより、村人たちは一九九三年から徐々にウチュラハイ村に帰還しはじめ村を再建した。村に戻った人々は、草のみが生い茂り廃墟と化した変わり果てた故郷の姿に涙した。帰還当初、地域はまだ安全とはいえず、政府軍が数年間にわたって近くにキャンプを設置し村の人々の安全を守った。その後、次々に村人たちが帰還することによって、村は大きくなっていった。現在は地区（distrito）となっている。しかし、様々な理由で帰還しなかった村人たちも少なくない。

四．ウチュラハイ村の元村長の語り

（1）農園主と先住民（農民）

ウチュラハイ村[1]は、昔は一つの農園（hacienda アシエンダ）でした。一人の農園主（hacendado アセンダード）の下、二つのパゴ（pago 地区）に分かれていました。その後、農園は二つに分かれました。その頃はまだウチュラハイ村の人口も少なかったので、私たちはみんな知り合いでした。私は八歳か十歳でした。今（二〇〇四年）七十一歳で、今年の十二月二十四日に七十二歳になります。

当時は農園主のためにあらゆることをして働いていました。農園主がこの村を作り、二体の聖人像を寄進しました。農園主たちは、「聖人に尽くしなさい。単なる義務としてではなく、十分敬意を払うようにしなさい」と言いました。それで、みんなで順番に祭りのカルゴ（cargo 責務、祭りの世話人の役割）[2]をして、聖人の行列（祭り）をしました。ミサのために司祭を招いたときは、[3]バラヨック（varayoq）[4]が食事を用意して接待をする責任がありました。

祭は四月に復活祭、それから五月にエスピリトゥ・サント（聖霊）の祭（十字架の祭のこと）がありました。[5]エスピリトゥ・サント（教会にあった十字架を指す）には羽を広げて飛ぶ白い鳩がついていました。その後、七月十六日と十七日にママチャ・カルメン。[6]十月七日は聖ロサリオ。村の守護聖人[7]は聖ロサリオでした。大きくて婦人の姿を

1　法的には厳密には「ウチュラハイ村」は集団としては様々な名称を経てきており、ここでは集落を含め人々が一つの集団とみなしてきた「ムラ」を指す。後にみるように農地改革によって「インディオ共同体」は農園に所属する集団と「農民共同体（Comunidad campesina）」の二つに分かれた。このため、文脈によって村は「農民共同体」の側のみを指すことがある。さらに、村人が「ウチュラハイ」といったときは、文脈によって村の中心部のみを指す場合もある。

2　ラテンアメリカに広くみられるカルゴ・システムのこと。カルゴ（責務）を果たすことによって威信を獲得していく。

3　村には教会があったが、司祭が不在であったため、祭りのために司祭を招き丁重にもてなした。また祭りのために村に司祭がきた機会を利用して、まとめて結婚式や洗礼式がとりおこなわれた。

4　vara（バラ）は権杖、yoq はケチュア語で所有を表し、文字通り訳すと「権杖を持つ人」の意。バラヨックはアンデス地域に広くみられ、カトリックの宗教儀礼と結びついた村の最も重要で権威がある政治宗教的組織である。バラヨックに所属する人々（カルゴを引き受けた人々）は役職に応じて権杖を所持していた（細谷 1997）。バラヨックの長はアルカルデ（alcalde）であり、アルカルデ・バラとも呼ばれた。

5　アンデスの村では五月に十字架の祭りがおこなわれ、村落内にたてられた十字架がすべて教会に集められミサがおこなわれる。アンデスでおこなわれる十字架の祭りについては（細谷 1997）に詳しい。

6　聖カルメンのこと。「ママ（mama）」はケチュア語で女性への敬称でもある。スペイン語では母を意味する。「チャ」は愛情や親しみを込めた接尾辞。

7　新大陸でスペインの支配を受けた地域では、カトリック教の布教がおこなわれた。スペインでは各村、街ごとに教会があり、村、街の守護聖人がいる。

していました。パトロン（patrón 主人、農園主のこと）が子供を抱いた聖ロサリオを持って来ました。大人になってからは私も聖人に寄進しました。

農園に属していた時代、私たちは農園の所有者であるパトロンのために、順番に一週間、全く報酬もなく奉仕しなければなりませんでした。村の上の方に住んでいる家族から始まり、順番に下方に住んでいる家族が交代でパトロンの家に行きました。[8] 全員がパトロンに奉仕をしなければなりませんでした。また、毎年マルカリ（地名）まで行って、パトロンのために荷物を運んで来なければなりませんでした。しかもそれはただ働きでした。そのために、リャマや馬などの荷役獣を用意しなければなりませんでした。オスに比してメスの荷役獣は半分しか担げませんでした。[9] ウチュラハイからマルカリまで、徒歩で丸一日かかりました。前日に荷を用意し、翌朝三時頃にマルカリを出発し、オコペカで夜を過ごし、夜遅く（ワンタの近くの）サン・ホセに着きました。そこで休み、翌朝ワンタ[10]に到着しました。一昼夜かかってウチュラハイ村からマルカリにいき、一日そこで過ごし、全部で三日間かかりました。

それから復活祭にはヒツジを連れて、ワンタのパンパ・キリャまで行かなければなりませんでした。エンドウ豆、ソラ豆、大麦、小麦、ハチミツ、チューニョ[11]など、様々な生産物も運ばなければなりませんでした。ドラム缶三缶分も用意しなければなりませんでした。リストに合わせて準備しなければならず、とても大変でした。パトロンがい

また、村、街の構造は、中心広場があり、その周囲に教会、役所等の政治組織、裁判所等、村、街の主要な機能が集中する。この村、街の構造はスペインによる植民地支配を受けた新大陸にも移植され、アンデス地域でもみられる。ここでは、ウチュラハイ村の守護聖人は、聖ロサリオであったことが指摘されている。この他、村では聖カルメンが祀られていたことが示される。村には年間を通じて様々な祭りがあり、バラヨックや祭りの主たるカルゴを引き受けたマヨールドモを中心に、村全体で祭りをおこなっていた。

8　村は山岳部にあり、海抜三五〇〇メートルあたりからラスウィルカ山の麓に相当する海抜四〇〇〇メートルを越える高度まで広がっているので、上、下という言葉が使われる。この他に、アンデスのケチュアの人々は伝統的に村を「上（Hanaq）」と「下（Uray）」の二つの集団に分けてきており、この場合は、物理的な上、下に関係なく、祭りをはじめとする様々な局面で、世界観の一部を構成して表出する。

9　リャマは伝統的に荷を運ぶキャラバンに使用されてきており、一頭あたり約三〇キログラム担ぐことができるとされている。

10　ワンタ郡の中心の街。ワンタはアヤクチョ市に次ぐアヤクチョ県第二の街である。

11　乾燥ジャガイモ。ジャガイモのフリーズドライ。山岳部の高地では昼と夜の寒暖差が大きい。これを利用して、収穫したジャガイモを高地に広げておくと夜間に凍る。昼になると凍ったジャガイモがとけるので、足で踏んで水分を出す。凍らせる、水を出すという作業を何度か繰り返すことで、保存可能なチューニョができる。

た時代はそんな有様でした。

ワンタにある農園主の家に行くときは、私たちは一週間昼夜を問わず働かなければなりませんでした。屋根葺きをしたり、全ての廊下を掃除したり。朝四時に起きて掃除をし、それからヒツジやブタなどの家畜に飲ませる水を汲みに行きました。パトロンの妻が水浴びするための水も汲みに行きました。水浴に使う七シリンダー入る容器があって、それに水を汲んでこなければなりませんでした。[12] あれだけ大量の水をどこに排水したのか。そんなふうにして一日中夜の九時まで働き、朝は四時には起きなければならなかったので、短時間しか眠ることができませんでした。午前中ずっとかかって水を汲み、台所を掃除し、クイ[13]やニワトリやヒツジの糞を掃除し、その後肥料にするためにそれをスコップで畑に運びました。ブタの餌は、大麦を濡らして粉にし、それを台所で薪で火を起こして煮て用意しました。

そして、一週間の奉公の後、土曜日か日曜日の朝十時に、家畜、磨き上げた廊下、台所用品、皿、スプーン、ナイフ、フォークなど、全てを一つ一つ完璧な状態で引き渡さなければなりませんでした。台所にいる家畜も、スコップ、ツルハシ、斧、耕具なども。それで初めて「全て引き渡した」と言われました。すると「ほら、これでパンを二個買いなさい」と二レアル、今で言えば僅か二十セント（約六円）を渡されました。

農園主たちは、「私の農園で働くのは義務だ。文句を言わず、何一つ盗むことなく、ただ一週間、それから二、三日私の畑で働きなさい。お

12 ジェンダー格差より階級差のほうが優先されることが示される。

13 テンジクネズミ、食用モルモットのこと。

前たちは私の土地で食べ、私の土地に住んでいる。私は土地を金で買った。お前たちは私たちに金を払う代わりに、受け取っているものの代わりに働くのだ。私たちは、私たちの土地にお前たちが植え付けをすることで、お前たちから何一つ奪ってはいない。お前たちが植え付けができ、喧嘩をしないよう、私たちは寛大にもボランティアで土地を提供している」と言い、さらに「これらの土地はお前たちのものだ。お前たちが所有者だ。順番に毎年耕していけば、お前たちが死んだ時、お前たちの息子や孫たちのものになっていく。私に奉仕した人々はそのまま残るだろう。喧嘩せず順番に働きなさい。そして、他所の土地の男や女を信用しないようにしなさい。他所の土地の婿や嫁になると、騙されるかもしれないから無駄になる。お前たちの土地を含め全てを奪うかもしれない。お前たちが持っている物が欲しくて結婚するのかもしれない。だからお前たちはウチュラハイ村の者同士で結婚すべきだ」と言いました。農園主は「私たちは現在お前たちの代わりに政府に税を払っている」とも言いました。

元村長の語りにもみられるように、村は当初一つの農園に属し、二つの地区に分かれていた。その後、農園主の家族の婚姻によって二つの農園に分かれた。元村長が属していた側の農園主の圧制はとりわけ過酷であった。ここでは、農園主が村人たちをまるで奴隷のように酷使していた様子が語られている。さらに、村落内での内婚を奨励し、働き手が失われることを防ごうとしたことも伺える。農園主たちは、

人種的にはヨーロッパ系（白人）やメスティソの非先住民の人々であった。先住民の人々は、非先住民の人々を自分たちとは区別し「ミスティ（*misti*）」と呼んでいる。一方、非先住民の人々は高地の先住民を「チュト（chuto）」と呼び蔑んだ。先住民の村は山岳部の高地に位置しているが、農園主はワンタ郡の中心の街ワンタに居住していた。街には学校、役所、市場、映画館などがあり、スペイン語が使用されている「ミスティ」の空間であった。しかし村でも、カトリックの宗教的行事に基づく祭りをはじめとする様々な祭りや儀礼があり、バラヨックが村の秩序を担い、楽しみや喜びにあふれた豊かな生活が営まれていた。

（2）農地改革：農園から農民共同体（村）へ

ファン・ベラスコ・アルバラド将軍の農地改革[14]が始まると、農園主が私たちをワンタに呼び出し、「私の所有物全て、収穫物、家畜を受け取るためカポラル（caporal）[15]を送る。あとはお前たちウチュラハイの者が所有者となり、自分たちで税金を払うことになる」と告げました。そして、私たちは全てカポラルに渡しました。

私たちはワンタから戻ってから「税金をどうやって払ったらよいのだろう」「どうして払わなければならないのだろう」と話しました。私たちは村会を開いて議論をし、農地改革の事務所に行って、なぜ私たちが税金を払わなければならないのか尋ねることにしました。私たちはそれぞれがどのくらいかかるかを考え、金を出せる者は手続きをしてくれる者に五レアル払いました。それから私たちは弁護士を探しま

14　ベラスコ将軍（1968-1975）は、ベラウンデ・テリー大統領の汚職疑惑に揺れる中、無血クーデターを決行し大統領に就任した。軍事政権であったが、大規模な農地改革をはじめとする「ペルー革命」を実行した。南アメリカの周辺諸国の軍事政権と異なり、世界で始めて民主的選挙による社会主義政権を樹立した隣国チリのアジェンデ大統領とも友好的な関係にあった。

15　カポラルは農園主が農園で働く村人の中から任命する、村における農園主の代理人。農地改革前は、二つの農園があったので、それぞれの農園に一名ずつカポラルがいた。

した。私たちみんなでお金を出し合ってアヤクチョ市にある農民協会の事務所に行きました。そこで働いている人々と話し、私たちはアレハンドロ・ワマンさん[16]に教えてくれるよう頼みました。アヤクチョ市での手続きは弁護士に尋ねながら書類を準備したので非常に時間がかかり、食事を持って行く者もありました。スペイン語がよくわからない時は、アレハンドロ・ワマンさんが通訳してくれました。村からアヤクチョ市までは一日半かかりました。ウチュラハイ村を出発してタンボまで行き、そこで集まり、それから車でアヤクチョ市に行きました。アレハンドロ・ワマンさんはもうある程度年齢がいっていて当時四十五歳くらいでした。村の有力者でしたが、特にカルゴに就いていたわけではありません。

アルゲダスの農園は農地改革の影響を受けませんでした[17]。アルゲダスの農園の人々は、何の手続きもせず、私たちの側の農園だけが手続きをしました。アヤクチョ市で弁護士を探し、裁判所で宣誓をした後、「私たちは祖父母の時代からここに住んでいます。農園主に無報酬で奉仕し、農園主たちは私たちにあらゆることを命令しました。祖父母の時代から農園主に仕えてきました。こんなに長く土地のために奉仕してきたのですからもう十分であり、私たちが政府にお金を支払う必要はないのではないですか?」と申し立てました。

当時のカポラルはマリアノ・ソトさんとマリアノ・ワマンさんでした。多くの手続きと何回もの会合の後、農園はなくなりました。そして、私たちはそれ以上税金を支払わなくて済んだのです。弁護士はトレド・

16　村人の一人であるアレハンドロ・ワマンはスペイン語が流暢ではなかったが他の村人と比較したらスペイン語ができ、村の名士であり、農園から農民共同体になることに尽力した。しかし、後述するように、センデロ・ルミノソによって殺害されている。

17　二つの農園のうち、元村長が所属していた農園ではない側の農園主。アルゲダスは農園で働く農民たちからパトロンとして敬意を集めていた。

キスペ博士でした。そうして、私たちの側の農園は「農民共同体」になったのです。「農民共同体」の側には村長（presidente プレシデンテ）がおかれ、アルゲダスの農園の側はそのまま農園としてとどまり、引き続きカポラルがいました。

私たちはアヤクチョ市の土地の判事から書類をもらい、判事が土地の境界を見にきて、地図を作りました。判事はチャルワマヨ（地名）まで車で来て、そこから馬に乗り、食事をしてから村に来ました。アレハンドロ・ワマンさんの妻が食事を用意して待っていました。しかし、判事は村の反対側に行ってしまい、そこで（農園主の）ドン（敬称）・ホセ・アルゲダスに遭遇しました。アルゲダス氏は「私は土地の登記書を持っています。ここは私の土地です。こちら側は私のものです」と言いました。判事は「よこしなさい」といい、彼から書類を奪い取り隠そうとしました。しかし、人々は判事はとんでもないことをしており、アルゲダス氏から何一つ取り上げるべきではないと抗議しました。

その後、こちら側の農園は「農民共同体」となり、農園は終わりを遂げました。そして、私たちは土地を分配し、畑を持っていない村人にも同様に土地を分け与えました。「農民共同体」の最初の村長は私の従兄弟のパトリシオ・モラレス・フィゲロアでした。農民共同体ができた頃から、「危険の時代」[18]ははじまっていました。

ある日、パトリシオとミゲル（仮名）[19]が私たちを酒宴に招きました。そして、クリストのところにいた店の持ち主が育てた頭が少し弱い娘（原文通り）を笑い者にしました。「誰も彼女に求愛したりしないだろう」

18 「危険の時代（tiempo de peligro）」もしくは「危険（peligro）」はケチュア語の中でスペイン語の単語が用いられ、紛争時代を意味する。

19 記者たちが殺害された日に、センデロ・ルミノソのメンバーとして村人たちに殺害された人物。

酔っ払って笑いながら、私たちはそんな風に話していました。その後すぐパトリシオが姿を消しました。みんな、パトリシオはどこに行ったのだろう、家に帰ったのだろうか、と話していました。私も家に帰り、他の男たちだけが残りました。さらに夜が更けて戻ると、おそらくその夜に何か集まりがあったのでしょう[20]、パトリシオは姿を消していました。私たちはみんなで、あちこちパトリシオを探しました。そして、私たちは農園に戻り、アレハンドラ・ガルシア夫人のところに行きました。その日は雪がたくさん降っていました。それで私たちは雪の上に残ったパトリシオの足跡を辿りました。足跡はミゲルの家を出て、角まで続いていました。その日は大雪で雹も降りました。パトリシオと店の娘とその赤ん坊は、古い家に入って雨を避けるために毛布を被ったのですが、そこに壁が崩れてきて下敷きになってしまっていたのです。傍には水溜まりができていました。

それで、村長がいなくなったので、ユラック・ヤク（地名）のフリアン・ガビランさんと私の二名のウチュラハイ村出身者の間で選挙をし、私がより票を集めたので村長になりました。ユラック・ヤクのガビランさんは副村長になりました。

ここでは、農地改革により農園が農民共同体になるプロセスが詳しく語られている。ベラスコ政権下のペルー革命で推進された農地改革により、ウチュラハイ村では二つの農園のうち、圧制がおこなわれていた側の農園は農民共同体となることを選択した。他方、アルゲダス

20　センデロ・ルミノソと関係した集会を示唆している。

が所有する農園に属する人々は、アルゲダスに敬意を抱いており、あえて農民共同体になろうとはしなかった。当時は村ではスペイン語を話せる人々はわずかで、読み書きができる人々はほとんどいなかった。ここで通訳をしたとされているアレハンドロ・ワマンも村人たちによると決してスペイン語が流暢に話せたわけではなく、スペイン語の読み書きもできなかった。このため、農民共同体となる手続きに難儀した様子が伺える。それは同時に村の人々が国家や政府の制度を学び、自らの文化（世界）の文脈に翻訳するプロセスでもあった。こうして、農民共同体となった側ではパラヨックを廃止し、国家の政治組織の末端に連なる村長（presidente）を中心とする組織が作られた。パラヨックのメンバーは前任者の依頼や村人の暗黙の合意のもとに決まったが、村長は選挙によって選ばれた。

初代村長の死は幾分謎をともなうものであった。村人たちは初代村長が、降ってきた雹を避けようとして入った小屋が崩れ、下敷きになったために亡くなったと考えた。しかし、元村長は同時に、後にセンデロ・ルミノソのメンバーとして知られることになったミゲルの家で集会がおこなわれていたことへの疑惑を表明している。

(3) センデロ・ルミノソの村への侵入

アンヘリカ（仮名）[21]はウチュラハイ村の学校の教師でした。彼女の家にはよくテロリストたちが宿泊していました。彼らは友人同士でした。ウチュラハイ村では、テルコ（terruco テロリストのこと）たちが

21　女性教員の名前は、「ウチュラハイ事件真実究明委員会」及び「真実和解委員会」の報告書、裁判記録等に実名で記載されているが、ここでは仮名とする。当時村には小学校三年生までの学校があった。離村に就任した学校教員は、長期休暇を除いて村に住み生活をした。このため、教員は村に居住する唯一のメスティソであった。アヤクチョ市出身の若い女性教員であったアンヘリカの経歴については、Sanchez&sanchez (2015) に詳しい。

村に来て村の人々と口論になった後、村を襲撃してきたので、自警団を組織することを決めました。当時、テロリストたちが村の人々を殺害していたので、記者たちが村に来る前に、政府軍がヘリコプターで村に来て、「政府はお前たちを守る。これから政府軍の基地を建設する。[22] お前たちはテロリストたちを殺害するように」といいました。一方、テロリストたちは村に来て女性たちを集めました。[23] それで、私たちは「これはやりすぎだ」「女性たちを夜に集めるなんて、もってのほかだ」と話しました。

テロリストたちは、夜になると大勢で叫びながら歩き回っていました。そして鎌とハンマーの絵を描いて回っていました。[24] 私が土を手に取りこの絵を消そうとしたところ、人々は「殺されてしまう」[25] といって止めようとしました。でも、私には何も起こりませんでした。それで、「誰がこんな絵を描いているのだ」とミゲルを問い詰めました。また、「エスピリトゥ・サントゥ（十字架の祭）の前夜祭の日に、大騒動を起こしたのは誰だ？私は村の上の方に住んでいるが、[26] 騒動を起こした者たちを茨でつないで連れてくるべきだった」とミゲルに言うと、「何を言うのです。騒ぎを起こした者たち（センデロ・ルミノソのメンバーたちのこと）は、もし私を馬鹿にしたらあなたを殺すと言っていますよ」と笑いながら答えました。「彼らに反対した者たちは、みんな殺すと言っていますよ」と言いました。それで、私は「殺すなら殺してみろ」といい、ミゲルと激しい言い争いになりました。

22　ワンタ郡の中心の街ワンタにあったスタジアムに海軍が基地を建設することを意味していたと考えられる。

23　革命学校を開き、革命教育をしていたことを意味する。

24　鎌は農民、ハンマーは労働者を表し、農民と労働者の団結の象徴としてマルクス・レーニン主義の共産主義や共産党で用いられてきている。センデロ・ルミノソのシンボルとして用いられた。

25　村の家は石、またはアドベと呼ばれる日干し煉瓦でつくられているため。

26　元村長は、村の中心部から遠く離れた場所に住んでいた。

ここでは、女性教員アンヘリカとセンデロ・ルミノソの関係が語られている。同様の証言は筆者がインタビューをした複数の村人によって語られている。センデロ・ルミノソの村への侵入は一九八一年頃からはじまった。村にきたセンデロ・ルミノソのメンバーは、学校教員の家に宿泊したり、ミゲルの家に寄った。一方、村の役職者たちは反センデロ・ルミノソの立場をとっていた。センデロ・ルミノソは女性たちを集めて革命教育を行うようになった。しかし、夜間に女性が夫や家族と別に単独で行動することがない村においては、それは慣習に反する行動であった。このため、女性が夜間に一人で出歩くことは、村の男たちのセンデロ・ルミノソへの懸念と反発を募らせることになった。

センデロ・ルミノソは村の山の頂にセンデロ・ルミノソの旗をたてた。しかし、反センデロ・ルミノソであった前述のアレハンドロ・ワマンはこの旗を抜いた。このため、センデロ・ルミノソは十二月に村を襲撃した際に、アレハンドロ・ワマンを捕らえ村の中心広場に連行した。村の中心広場には村人たちが集められ、そこでセンデロ・ルミノソはアレハンドロ・ワマンを殺害すべきかと問いかけた。そこにはセンデロ・ルミノソのメンバーたちがおり、「Sí（スィー）」（そうだ、殺せ）と叫び、アレハンドロ・ワマンは殺害されることになった（Hosoya 2003, CVR 2003, 細谷 2005）。当時センデロ・ルミノソはこのように村の有力者や役職者を処刑し、人々に恐怖を植え付けた。他方で、ウチュラハイ村や周辺村では、センデロ・ルミノソから自らを守るために村人たちが

自警団を組織した。

非常事態宣言地域に政府軍が派遣された後、海軍はワンタ郡の中心のワンタの街にあるスタジアム（写真6・7）に基地を建設する準備を進めていた。村人たちによると、政府軍は村に来て、政府軍はヘリコプターで来るが見知らぬ人々が地上から（徒歩で）来た場合はセンデロ・ルミノソの仲間なので、闘い殺害するように命じた。

政府軍が村に来た件については、ジャーナリストのサンチェス兄弟（Sanchez &Sanchez 2015）によって詳しく記述されている。ヘリコプターで来た政府軍は、村に滞在し村の役職者たちを集め、さらに若者たちにセンデロ・ルミノソと闘うための訓練をしている。集められた役職者の中には当然村長も含まれていたと考えられる。

（4）記者たちの殺害と元村長の逮捕、裁判

事件が起こったのは、一九八三年一月二十六日である。この日の午後、記者たちはインファンテの異父兄弟のアルグメドの案内により村に着いた。筆者によるインファンテとアルグメド兄弟の母へのインタビュー（2006）によると、彼女は子供たちを育てるために商人として働いていた。近隣村の人々も集まる祭りの日には、ウチュラハイ村に商人がきて市（イチ、mercado メルカード）がたち、野菜、肉、果物などの食料品、家畜、衣類、鍋、フライパン、包丁、ボールなどの調理用品、ユーティリティなど村では手に入らない生産物や品々を販売したり物々交換をした。このため、ウチュラハイ村で市がたつ日には商売にきており、

村にはカトリック教の名付け親の関係にある擬制親族もいた。

これまでの記録や筆者のインタビューによると、記者たちを案内したアルグメドは、村の入り口手前の山頂まで記者たちを見送り引き返そうとした。記者たちが村の中に入ろうとすると、村の入り口近くに家があったテニエンテ・ゴベルナドール（teniente gobernador）の家にいた人々がでてきた。そして、記者たちをセンデロ・ルミノソのメンバーと誤解し、村人たちを呼び集め襲いかかった。テニエンテ・ゴベルナドールは農民共同体となった側の、村長を中心とする組織の役職の一つで、村の秩序を守るいわば警察のような役割をする。

筆者の調査によると、テニエンテ・ゴベルナドールたちは、その日の朝に、村の一人の若者をセンデロ・ルミノソの仲間の容疑で告発した。若者はセンデロ・ルミノソとの関係を否定し、若者の親は彼を守ろうとしたため、テニエンテ・ゴベルナドールたちは、無実を証明するために一アロバ（十一、五～十六リットル）の酒を「罰金」として支払うことを要求した。[viii] テニエンテ・ゴベルナドールの家には人々が集まり、この酒を飲んで酔っ払っていた。そこに記者たちが現れたのである。しかも、前述のように、村人たちは政府軍からセンデロ・ルミノソと闘うことを奨励されていた。とりわけ徒歩で村に来るよそ者に気を付けるようにと指示されていた。

記者たちをセンデロ・ルミノソと誤った人々は、当時はまだ武器の支給がおこなわれていなかったので、[ix] 石やオンダ（投石具）、マチェテ（山刀）、斧などを持って記者たちに襲いかかった。近くに住む人々に

も「センデロ・ルミノソ」との闘いへの参加への呼びかけがおこなわれた。「センデロ・ルミノソ」との闘い（実際には記者）に参加しない村人は、センデロ・ルミノソのメンバーとみなすという圧力もかけられた。

村の入り口まで同行し見送ったアルグメドは、兄を含む記者たちが襲われるのを見て逃げようとしたが、追ってきた村人たちに捕らえられる。その後アルグメドと、センデロ・ルミノソの仲間とみなされており、かつ記者たちをかばおうとした村人ミゲルが村人たちの手によって殺害された。

記者たちが殺害されたのは一月です。私は四月にワンタに行ったときに足の骨を折りました。妻と一緒に父のウルバノがいるワンタに行って、そこで父の家に泊まり翌日父から買った馬でワンタから帰ってきました。しかし気性が荒い馬だったので、鞍をつけましたが帰る途中で岩の上に振り落とされ足を折ってしまいました。当時、記者の殺害に関わった人々は皆恐れて村から姿を消していました。

シンチス[27]は五月にウチュラハイ村に来ました。当時、アルグメドの遺体がまだ見つからず山中を探していました。[28]それで、誰かが「足を折った村長が上の方に住んでいる。きっと彼が知っているに違いない。嘘をつくかもしれないが」と密告しました。そう告げたのはパリア（ウチュラハイ村の属集落）の人だったと聞いています。それで、私がひどく具合が悪かった時に、シンチスが私を捕まえにやって来ました。五月

27 sinchis もともとは反政府組織鎮圧のための特殊警察を意味するが、アンデスの山岳部では政府軍、警察一般を意味するようになった。村にヘリコプターで来たのは政府軍であった。

28 村人たちは、記者たちを殺害したことは、テロリストを殺害したとして当局に報告したが、アルグメドの殺害に関しては沈黙を守った。アルグメドの遺体が探していた家族によって山中で発見されたのは、約一年後であった。

十四日のことです。シンチスが私の家に来て、ベッドから引っ張り出して、私の馬の綱を使って縛り上げ連行しました。そして、村（の中心）にある「農園の家（casa de hacienda）」[29]に連れて行きました。そこには判事と記者とたくさんのシンチスがいました。[30]シンチスは私を連行し、「ワンタで治療しよう、保健所があるから」と言いました。「どのように足が折れているのか診察するだろう。保健所が治療するだろう」と言い連れて行かれました。

連行されると判事のフローレス・ロハスがいて写真を撮影しました。当初、刑務所に行くのではなくリマに連れて行こうとしました。私が拒むと軍の基地Rojo-Aに連れて行かれました。そして背中に麻酔をして手術をし、縫い合わせたことで足はまっすぐになり治りました。ギブスをしたまま四日後に退院しました。その時、リマに連れて行かれずアヤクチョ市で手術を受けることができたので、今歩くことができます。

私は無実の罪で捕らえられたのです。私は村の役職者だということで捕らえられ、罪を償うことになりました。村の役職者だったがために。私はワンタ・カサ（ウチュラハイ村の上方にある集落）で生まれました。私はウチュラハイ（村の中心部）の者ではありません。ラスウィルカ山[31]の麓の出身です。ワンタやタンボにも住んでいました。一方、記者たちが殺害された場所は、ウチュラハイ村の中心近くのワチュ・カサです。[32]

記者たちが殺害された後、誰が最初にヘリコプターで来たか知りま

29　村の中心には、農園主の家があった。しかし、この家には農園主が居住していたわけでなく、農園主に収める収穫物を保管したり、村に農園主が来た時に休むのに使用されていた。

30　アンデスの村は日本の伝統的な村と似ており、村落内婚をしてきている。このため村には同姓の人々が多い。筆者のインタビュー調査によると、政府軍が村長を捕らえにきたとき、政府軍は誤って村の同姓同名の別の人物も連行しようとした。その際、まだ十代半ばだった娘を両親の目の前で射殺している。

31　植民地時代の記録にも残る古来から聖なる山、神の山として崇拝されてきた高峰。万年雪を抱いて白く輝いていたが、現在は地球温暖化の影響で完全に雪が溶けてしまっている。

32　元村長の家から記者たちが殺害された村の中心近くまでは一時間程度かかる。

せん。赤いヘリコプターで来て、砂糖やパンを置いて行きました。テロリストが私たちを殺したときいて「政府はお前たちを助けている。反乱者たちを信用するな。お前たちは村を守るべきだ」と言いました。それを言ったのがバルガス・リョサでしょうか?何度もいろいろな人々が来たので、誰がバルガス・リョサなのかはわかりません。

リマ（の裁判所）で写真を見せられました[33]。その写真には記者たちを捕まえた人々がいました。罪のある人々とともに、意味もなく無実の人々も写っていました。その写真のために、無実の人々も罪があることにされてしまったのです。女性も、男性も、子供も、村全体が。村全体が非難されることになりました。写真に写っていたテニエンテ・ゴベルナドールの妻が全て見ていたと思います。テニエンテ・ゴベルナドールの妻が走り出て来て、人々を呼んでいました。走り出て来て殺したのでしょう。写真に写っています。オンダ（投石具）や棍棒を手にしている人々もいました。コカの葉を噛みながら。写真にはテニエンテ・ゴベルナドールの家の下の方が写っていました。私はその写真をアヤクチョ市とリマの裁判所で見ました（写真8）。

当時のテニエンテ・ゴベルナドールのフォルトゥナート・ガビランさんはワフチャ・カサ[34]に住んでいました。ガビランさんはまだ若かったですが、長い間テニエンテ・ゴベルナドールの役職についていました。妻はイグナシア・ガルベスさんでした。でも、もう生きてはいません。彼らの家族は誰も残っていません、子供たちも。家族全員完全に消えてしまいました[35]。

33　殺害された記者たちの一人であるカメラマンのウィリー・レットが殺害される直前に撮影した写真を含むフィルムが発見されたことによる。

34　村の入り口近く。

35　家族全員、センデロ・ルミノソによって皆殺しにされたことを意味する。事件後、テニエンテ・ゴベルナドールは身の危険を感じて姿を消したが、センデロ・ルミノソの追跡を受け、後述するように後にセンデロ・ルミノソによって殺害されている。

記者たちの殺害に関わり罪を犯した人々はすでに逃げてしまっており、私は五月に具合が悪いままの状態でアヤクチョ市に連れていかれました。証人として連行され、アヤクチョ市ではひどい扱いを受けました。頭を殴りつけ、口に鉛筆を突っ込み、「言え、吐け、証言しろ。誰が殺したのだ?殺害者たちはどこにいるのだ?記者たちにどうやって近づいたのだ?」と尋問しました。「私は何も見ていません。私は彼らと一緒にはやっていません」と答えると、激しく拷問しました。それで私は「もしそうしたいなら、私を殺すことだってできます。それで私の身体をあけて見てひっくり返して隅から隅まで調べれば、私が何も見ていないことがわかるでしょう。誰がやったかなんて知りません。私は記者たちにふれてすらいません。彼らの物を盗んでもいません。もしその場にいたらお話ししたでしょう。でも、私はその時ハトゥン・カサ（地名）にいました。遠く離れた場所に。お望みならばどうぞ私を殺して下さい。でも、私は何も知りません。あらゆる人間より高い所に神がおります。神が私と共におります[36]」と言いました。

アヤクチョ市の法廷では散々な目にあいました。判事も記者たちも、亡くなった記者たちの妻も、みんな私に敵対する立場をとりました。私は孤立無援でした。裁判官だけが私の味方でした。判事たちは権力を笠に着て不愉快な態度をとり、「お前たち殺人者よ、話せ」と問い詰めました。記者たちは執拗に私に質問し異を唱え反論しました。裁判は一年間続きました。村の過去や、私が誰か、どのような争いを起こしたことがあるか、どんな悪癖があるか、刑務所に入ったことはある

36 元村長が敬虔なカトリック信者であることを示す。

か等、繰り返しきかれました。でも、私たちには何もありませんでした。裁判が終わると、私たちに敵対していた判事は「よろしい、私たちはお前たちが有罪であるという証拠を見つけることができなかった。お前は真実を言っている。お前たちは自由の身だ」と言いました。そして記者たちに、「モラレスには罪があるとしたが、無罪であることが判明した」と言いました。私が判事に「私は真実を述べているにもかかわらず、あなたは私を告発し、人々は私を殺人者と呼んで憎悪し非難してきました」と言うと、「心配するな、もう出ることができる」と言いました。

しかし、一年間アヤクチョ市で裁判をした後、今度はリマで裁判をすることになりました。アヤクチョ市の裁判で結果が出たにもかかわらず、記者の家族たちが「どうして罪のある者を無罪にするのだ」と言って控訴したからです。私たちは「もう自由だ」と言われたにもかかわらず、再度裁判をすることになりました。リマでの裁判にかかる時間は一ヶ月くらいで、長くても三ヶ月だろうと言われました。そして私たちは飛行機でリマに運ばれました。しかし、リマでは三ヶ月後に審理が始まり、最初からやり直しでした。アヤクチョ市の裁判とリマの裁判は別だと言われ。アヤクチョ市で一年、リマで一年。その裁判は、正義がないまま不当にも私が殺人者であるという判決を下しました。しかし、それは真実ではありません。私は無実です。

リマで裁判をした後、私は一九八三年から一九九〇年まで七年間刑務所にいました。リマに住んでいる兄弟が、一年間グリンゴ[37]たちが話

37　グリンゴは元来アメリカ合衆国の白人をさすが、アンデスの先住民にとっては一般にペルー人であろうが外国人であろうが欧米系の人々はいっしょなので、ペルー人であっても欧米系の白人の人々を「グリンゴ／ガ」と呼ぶ。

しを聞いて調べたが、無実を証明することは困難だ、と言いました。刑期を終えるとリマからワンタに移送され、様々な署名をした後、解放されました。私の身体を調べ、問題がないか家族を調べ、模範囚として解放されました。私は、最高裁判所[38]の近くのサン・ホルヘ刑務所に収監されていました。サン・ファン・デ・ルリガンチョ刑務所[39]やカストロ・カストロ刑務所でなくてよかったです。それらの刑務所は待遇が悪く、悪名が高かったからです。

一緒に捕まって収監されることになったシメオン・アウカトマさんはバラヨックのアルカルデでした[40]。刑務所ではアウカトマさんとマリアノ・ハサニさんと私は、二階にあった同じ房で三人一緒にいました。アウカトマさんは、ウチュラハイ村のアレハンドロ・ペレス[41]さんがティフラ・コチャで殺害された時に、村の人々に「アルカルデはただいるだけで何もしない、ワンタに報告に行くべきだ」と言われました、村人たちにそう言われたので、アルカルデだったアウカトマさんは馬に乗り、ワンタにある警察に行きました。しかし、ワンタに着くと警察に捕らえられました。そして、アヤクチョ市で申し開きをするようにと言われ連行されました。

マリアノ・ハサニさんはウチュラハイ（農民共同体）出身ではなく、近くのパリアの出身でした。マリアノさんが酔っ払って「俺は、俺たちを守るためにテロリストたちを殺害することに賛成だ」と言ったのをチャカバンバ[42]の人がきき、「彼も殺害に参加した」と密告したため捕まりました。マリアノさんは酔っ払ったままタンボで逮捕されました。

38　リマの中心にあるアルマス広場（Plaza de Armas）の近く。

39　アラン・ガルシア政権下の一九八六年に刑務所で暴動が起こり、政府軍によって鎮圧されたが、その際に虐殺された囚人の数は百名以上とも五百名以上ともいわれており、現在も不明である。

40　アルゲダス側の農園は農園として残ったので、バラヨック制度が存続した。

41　七月の聖母カルメンの祭の最終日の深夜から明け方にかけておこなわれたセンデロ・ルミノソによる虐殺を指す。アレハンドロ・ペレスは、リャスウィルカ山の麓の集落ティフラ・コチャに居住しており、一九八三年の聖母カルメン祭りのマヨールドモ（祭りの最も主要なカルゴ）であった。そして、祭りの最後の夜に、慣習通りに村外から雇った音楽隊を含め祭りを手伝った人々をもてなし、ペレス家で「デスペディア（お別れ）」をして飲み歌い踊って祝っていたときに、センデロ・ルミノソによる襲撃があり人々の虐殺がおこなわれた。

42　インファンテの母、アルグメドとその家族が住んでいた集落、タンボ区に属する。

私たち三人は一人一人別々に逮捕され、正義がないまま訴えられました。訴えられた三人はみんな無実でした。

私たち三人は長年にわたって一緒に刑務所にいました。でも、実際に記者たちを殺害したウチュラハイ村の人々は何とも思わず、私の悪口を言い私の畑を奪いました。私は村の人々のために尽くしたというのに。村の人々は（帰還政策がはじまると）素知らぬ顔で戻ってきています。私が彼らのためにしたことを認めず、何一つ助けてもくれません。たったの一セントも、ほんのわずかな食料も。

私が連行された際も、誰も助けてはくれませんでした。私の妻だけが心配して、所有していた家畜を売ってお金を工面し、私のために奔走してくれました。私がアヤクチョ市の拘置所にいる時、妻が来てくれました。妻は弁護士費用を支払うために、家畜を全部売り払いました。でも、弁護士は何の役にも立ちませんでした。妻はテロリストによって殺害されました。テロリストは娘の一人と、二人の娘婿も殺害しました。家族のうち四人がテロリストによって殺害されました。衣服、家畜、農作物の種、仕事など、私は持っていた多くのものを失いました。私の家も燃やしました。テロリストたちは私の全てを奪いました。そして、やせ細った二人の幼子が孤児となってワンタに残されました。食べることができる日もあればできない日もありました。リマに移送される時、孤児となった幼子たちはどうなるのかと役人に尋ねました。すると役人たちと一緒にいることになると言われました。孤児院に連れていかれたのですが、私の息子のエミリオは、弟をこんなところ（孤

児院）に置いておくわけにはいかないとワンタに連れて行きました。エミリオはセルバに働きに行き病気で亡くなりました。息子たちはまともな教育を受けることもできませんでした。私の母は私と子供達（孫）のことを思って毎日泣いていました。誰も私たちのことなど気にかけてくれませんでした。私たちの苦しみを。

アウカトマさんは刑務所で亡くなりました。彼はきちんと食べませんでした。沸かした水ではなく、水道から直接冷たい水を飲んでいました。アウカトマさんには妻も子供[43]もいません。テロリストたちが彼の妻と子供たちを殺害してしまいました。アウカトマさん自身も刑務所を出て帰って来ることができませんでした。彼は結核に罹りサン・ファン・デ・ルリガンチョ刑務所で亡くなりました。喉が腫れ上がり、「ア、ア」というばかりで話すこともできなくなりました。臨床の最期の祈りも捧げることができませんでした。ゼーゼーいうばかりでした。それで、サン・ファン・デ・ルリガンチョ刑務所に運ばれました。「他の囚人たちに病気をうつすわけにはいかない」と言われ。アウカトマさんはサン・ファン・デ・ルリガンチョ刑務所に移されて亡くなったので、私たちは埋葬に立会うこともできませんでした。私たちも埋葬に立会うはずで、そのために監察官が任命されていました。でも判事が署名してくれませんでした。それで私たちの弁護士だけが立会いました。一年分だけニッチェ（遺体を置く場所）を購入しその後火葬しました。アウカトマさんは刑期を終える少し前に亡くなりました。後一年か二年というところで。いずれにせよ、残っていた刑期はわずか

43　実際には後述のように息子が一人生きのびている。

でした。マリアノさんは私と一緒に出所し今はセルバにいます。

先述のように、ウチュラハイ事件当時、村は二つの地区に分かれていた。そして、ベラスコ政権下で農地改革がおこなわれると、一方の地区のみが「農民共同体」となり、他方は農園として残った。これにより、「農民共同体」となった地区は国家の組織の末端に連なる村長組織を有し、他方、農園のままとどまった側にはアンデスの伝統的組織であるバラヨックが残った。このように事件当時村には、地区によって異なる二種類の政治組織が存在していた。

事件後「農民共同体」の村長であったディオニシオ・モラレス・ペレスと、アルゲダスの農園の側のバラヨックの長であるアルカルデのシメオン・アウカトマ・キスペ、そしてパリア地区のマリアノ・ハサニ・ゴンサレスの三名が逮捕された。裁判はアヤクチョ市とリマでおこなわれ、三名に有罪判決が下された。元村長とバリア出身のゴンサレスは刑期を終え釈放されたが、アウカトマは獄死した。

元村長は、自らを含め記者たちの殺害容疑で捕らえられ有罪判決を受けた三名は無罪であったと語る。元村長が記者たちの殺害に参加しなかったことは、複数の村人が語っている。ウチュラハイ村の人々は農牧業を営み、家畜を所有していることから、広い範囲にいくつかの集落を構成して居住していた。家畜の放牧をするためには、密集して居住すると家畜が病気になる。三名は記者たちが殺害された村の中心部から一時間、もしくはそれ以上かかる集落に住んでいた。パリアは

ウチュハライ村の中心から離れた付属集落であり、密告した人物自体他村出身者であることから、殺害に参加したとする根拠も薄い。アウカトマも殺害が行われた村の中心部から遠く離れた集落に居住していた。記者たちの殺害は短時間でおこなわれているため、呼ばれてから現場に駆け付けたのでは間に合わず、彼らが偶然村の中心部に居合わせていた場合を除き、実際には殺害に参加することは不可能であった。[x]

アウカトマに関連して、当時バラヨックの一員であったある村人は次のように語っている。

マルティン[44]を捕まえた後、テロリストたちが来ました。ワイチャオ村でテロリストとの争いがありました。前方の「農民共同体」でテニエンテ・ゴベルナドールだったガビランさんたちが、テロリスト[45]たちを殺しました。でも、私は見ていません。テロリストたちはたくさんお金を持っていました。それは私がバラのカルゴにある時に起こりました。エステバンという名のアルグアシル[46]がおり、彼が私に上の方の地区[47]でテロリストを殺したと伝えました。私たちはテニエンテ・ゴベルナドールの家に行き、その後、アルカルデの家に行きました。「アルカルデのアウカトマさんに知らせなければならない」と言われ、アルカルデの家に行きました。その時、テニエンテ・ゴベルナドールの家で、「村に行って、（センデロ・ルミノソと闘うために）立ち上がるように言おう」「イキチャ[48]に行こう」と言っているのを聞きました。イキチャではテロリストたちが人々を殺していました（二〇〇四年筆者インタ

44 外から村に組織化しに来たセンデロ・ルミノソのメンバー。

45 実際にはテロリストではなく記者たちのことを指している。

46 バラヨックの一役職。バラヨックのなかでは下位の役職。

47 農民共同体側を意味する。

48 近隣の村。

ビュー、原文ケチュア語）。

ここでは、一村人が当時事件をどのようにみて、どのように行動したかが示されている。記者たちは「テロリスト」と認識され、アルゲダスの農園に属していた話者は、農民共同体側の役職者であるテニエンテ・ゴベルナドールたちが「テロリスト（実際には記者）たちを殺害したという知らせを、下位のバラヨック（alguacil アルグアシル）からきき、バラヨックの一員としてその長であるアルカルデに知らせねばと考えアウカトマに知らせにいった。ここでは同時にアウカトマが殺害には関与していなかったことが示される。この証言と呼応するように、アウカトマの隣人で従姉妹であった女性は次のように語る。

記者たちが殺害された後、夜になってから私たちが住んでいるインティワタナに、「タイタ[49]・アウカトマ、急いで来てください、テロリストたちが私たちを殺害しています。手伝って下さい」と言って二、三名の人々が呼びに来たのが聞こえました。高台に来てアルカルデのアウカトマさんを呼んでいました。それをきいて、アウカトマさんは私の夫や従兄弟たちと馬を探しに行きました。「ウチュラハイ[50]で何が起こったのだろう」、そういいながら馬にまたがって見に行ったのです。

そして彼らは悲痛な面持ちで帰ってきました。恐ろしさに泣いていました。それから、私たちに話し始めたのです。「その場所一体に、みんなとても太った人々[51]が倒れていた」それを見て戻ってきたのです。「ウ

49 「タイタ」はケチュア語で「父」を意味するが、男性に対する敬称としても使用される。

50 この文脈ではウチュラハイ村の中心部を指す。

51 記者たちのうち最年長のセダノとインファンテは恰幅がよかった。また、非先住民系の人々に比べて一般に小柄で痩せている先住民の人々からみれば、非先住民は体が大きくみえたと考えられる。

チュラハイの人々[52]は何てことを仕出かしてしまったのだろう」「ああ、愛する人よ、これから彼等に何が起こるだろう」それが私たちに起こったことです。私たちは底知れぬ恐怖を感じました。私たちはコムニダ（共同体）に奉仕していた[53]ので（事件が起こったことを）私たちに知らせにきたのです。私は夫から聞いただけで直接は見ていません。

アルカルデだったシメオン・アウカトマさんは私の従兄弟でした。「アウカトマ」は「チチャを飲む人」という意味です。彼はフロントン刑務所[54]で亡くなりました。記者たちの殺害には関わらなかったのに。彼はスペイン語が全く話せず、読むこともできなかったのですが、ワンタに自主的に訴えにいったのです。[55]アウカトマさんは私の夫に「行こう。殺された人々をこのままにはしてはおけない」そう言って、気の毒なアウカトマさんは私の家の裏を通って出掛けて行きました。自分自身で決断して訴えにいったのです。何の罪もなかったのに訴えに行ったために、刑務所に入れられそこで亡くなりました。

アウカトマさんは記者たちが殺害されるところを見ませんでした。彼は私たちが住んでいたプトゥカの裏に住んでいました。[56]アウカトマさんはバラヨックだったので、何が起こったのか見に行かなければならなかっただけです。彼は、記者たち[57]がみんな亡くなってから（村の中心に）行ったのです。そして、役職者として（センデロ・ルミノソがおこなった虐殺を）訴えに行かなければならないと考え（ワンタに）行ったところ、もう戻って来ず姿を消しました。血を吐きながら亡くなったと聞いています。遺体を引き渡すようにとは誰も言いませんで

52　この文脈ではウチュラハイ村の中心部を指す。

53　バラヨック等の役職に就いていたことを意味する。

54　実際には、サンファン・デ・ルリガンチョ刑務所。エル・フロントン島の刑務所とサン・ファン・デ・ルリガンチョ刑務所では一九八六年に刑務所で暴動が起こった際に、軍が投入され大規模な囚人の虐殺がおこなわれた。

55　聖母カルメンの祭りの最後の日にセンデロ・ルミノソがおこなった村人たちの虐殺を指す。

56　殺害が行われた村の中心部からは遠い場所にいたことを意味する。

57　先述のインタビューと異なり、すでに村では様々な情報が伝えられているため、話者は「記者」としている。

した。騒乱の時代にアウカトマさんの家族は全員亡くなりました。[58]みんな姿を消しました。誰も残っていません（二〇一九年八月筆者インタビュー、ケチュア語）。

話者たちは、それぞれが、異なる機会に自らが見聞きしたことを語っており、お互いに何を語っているかは知らない。当時者であった村人同志で紛争時代について語ることは難しい面がある。しかし、それらを集めると、まるでピースが収まっていくように出来事が紡がれていく。さらに、アウカトマの姪にあたる人物は次のように語る。

私の叔父（アウカトマ）はウチュラハイ村の役職者でした。記者を殺したのはウチュラハイ村の農民共同体側の人々で、叔父は無実であったにもかかわらず、記者たちの死に罪があることにされてしまいました。叔父は村の中心から遠いプトゥカに住んでいたというのに。

村では見知らぬ人が村に入って来ようとするとき、役職者が呼び止めて確認します。それで叔父は呼ばれて、畑で働いていたそのままの恰好で駆けつけました。そして、すでに記者たちの殺害がおこなわれた後に着きました。殺害はウチュラハイ村の中心部に住む農民共同体側の人々がしたことです。村のなかには起こったことを知らない人々もいたので、人々を集めて集会がおこなわれ伝えられ、それで何が起こったのかはじめて詳細を知りました。「今、我々はどうしたらよいだろうか？」「報告しなければならない」記者の死をめぐって集会がおこ

58　後述のように息子の一人は生き延びている。

なわれましたが、当時人々は「記者」といわず、「よそ者」が村に来たとだけ言っていました。[59]それで「私たちはどうしたらよいのだろう」「ここはもう危険の渦中にある」そんなふうにみんなで話合って戻ってきました。

叔父がリマの刑務所に入ったとき、私はまだ幼かったです。叔父は捕まって、妻や子供たちを思い深く悲しんでいるとききました。そして、心配のあまり病気になり、刑務所で亡くなったのです。叔父が亡くなったとき、私たちは誰もそのことを知りませんでした。刑務所にはどのくらい入っていたのでしょう。すでに亡くなってから私たちに連絡がありました。ニュースが流れたので、それで私たちは叔父の死を知りました。でも、私たちが知ったのは叔父の死から大分経った後でした。私たちはとても悲しみました。

アウカトマさんには三人の息子がいましたが、二人はプトゥカで行方不明になって殺されました。長男のみが生き残っています。末っ子は女の子でした。私たちは、ワンタで彼女といっしょに住んでいましたが、[60]海軍に連れ去られて現在も行方不明のままです。当時彼女にはまだ一才か二才の小さな男の子が一人いましたが、その息子とともに連れ去られ姿を消しました。[61](二〇一九年八月筆者インタビュー、ケチュア語)

長期に渡って裁判がおこなわれる一方で、ウチュラハイ村はセンデロ・ルミノソと政府軍による攻撃を受け、一九八四年末には村自体が

59　当時は村のほとんどの人々が文盲で、街に行った経験がないとテレビや新聞をみたこともなかったので、村では「記者」がどのような存在であるのか知られていなかった。ほとんどの人々は「記者(periodista)」という存在や、「記者」というスペイン語を、事件後に知るようになる。事件当時は村人たちによって、「よそ者」、「テロリスト」等と語られ、認識されていたことを示す。

60　話者の家族は、センデロ・ルミノソと政府軍の攻撃を受けるなかワンタの街に逃げた。ワンタの街の郊外には、高地の村から逃げきて国内避難民となった先住民の人々が住む地区ができた。夫を殺害され未亡人となり、乳飲み子を抱えていたアウカトマの娘は話者の親戚だったので、ともにワンタの街に逃げた。そして、同じく未亡人となっていた叔母にあたる話者の母が若い彼女のめんどうをみていっしょに暮らしていた。

61　行方不明になったことを意味する。当時、ワンタにあった軍の基地に多くの人々が連行され行方不明になっている。それらの人々は秘密裡に殺害された。

消滅してしまっている。センデロによる大規模な襲撃は、五月のエスピリトゥ・サント（十字架の祭り）の日と、七月のママチャ（聖母）・カルメンの祭りの最後の日におこなわれた。前述のように、村人たちは広範囲に散逸して居住しているが、祭の日は人々が集まるため、反政府組織の側からみれば効率的に襲撃をすることができた。この点がセンデロ・ルミノソの大規模な襲撃に祭りの日が選ばれた理由であると考えられる。

生き延びた村人たちは親戚縁者や擬制親族がいる他の村や熱帯雨林地域、ワンタ、タンボ、アヤクチョ市、リマ等に逃げ国内避難民となった。熱帯雨林地域ではコカやコーヒーの栽培がおこなわれており、もともと村人たちが農閑期に働きに行くことがあった。しかし、逃げ延びた先で命を落とす人々も少なくなかった。真実和解委員会が記録しただけでも一三五名の村人たちがセンデロ・ルミノソ、もしくは政府軍によって命を落としている。[xi]

一方リマでは、逮捕された三名の先住民を被告人とする裁判が続けられた。裁判は四年間にわたって続き、最終的な判決は一九八七年に下されている。しかし、ウチュラハイ村は、事件の翌年の一九八四年末にはすでに消滅しており、そこに住んでいた村人たちも姿を消していた。つまり八名の非先住民の記者の殺害をめぐる裁判は、大規模な虐殺によって住民がすでにいなくなり村自体が消滅してしまった村で起こった事件について、殺害には関与していなかったと考えられる三名の先住民を被告人としておこなわれたのである。しかも、後述するように、実際に殺害に関与した人々のほとんどは、裁判が始まる前に、村から逃げるか、記者の遺族の一人の復讐により殺害されこの世に存在していなかった。このまるで「魔術的リアリズム」のような、不条理な裁判に疑問がもたれることはなかった（写真9）。

無名の村人、農民であったウチュラハイ村の人々は、事件を機に、村人ではない人々の目にはまるで主人公がある朝目が覚めたら巨大な虫に姿を変えていたカフカの『変身』のように、無知で野蛮な殺人鬼に姿を変えてしまった。事件後、ウチュラハイ村の人々は命の危険を伴う過酷なスティグマを刻印されることになり、国内避難民になっただけでなく、出身村を偽って暮すことを余儀なくされた。

ウチュラハイ村で調査をおこなったバルガス・リョサは次のように記す。

> 集会が終わり、われわれが見たり聞いたりしたことに強い衝撃を受けて―記者たちの墓はまだ開けられたままだった―アヤクーチョへ帰ろうとしていたとき、村の一人の小柄な女性が急に踊りだした。彼女はわれわれには意味がわからない歌を口ずさんでいた。女は子供みたいに小さかったが、皺の寄った老婆のような顔をしており、その両頬は縦横に走る皺だらけで、腫れぼったい唇は高原の寒気にさらされて暮す者のそれだった。彼女は裸足で、色物のスカートをはき、リボンのついたソンブレロをかぶっていた、そして歌ったり踊ったりしている間、一握りのイラクサでわれわれの足をそっと叩

いていた。古い儀式に則ってわれわれに別れを告げていたのだろうか。われわれもまた彼らの生活に新たな苦悩と驚愕の種をもたらした、ああしたよそ者―〈センデリスタ〉、〈記者〉、〈スィンチス〉―の一部なので、われわれのことを呪っているのだろうか？われわれのために悪魔払いをしてくれていたのだろうか？[xii]（バルガス・リョサ 1990：1085-86）

村ではカーニバルの祭りで、イラクサ（アシ）を束ねたもので足を叩く（写真10）。バルガス・リョサの一行が村を訪問したのは、カーニバルの頃であった。しかし、この行為をめぐって、バルガス・リョサは「われわれのことを呪っているのだろうか？」と思考をめぐらす。ウチュラハイ村の人々とは人種的背景が異なり、ヨーロッパ系であるバルガス・リョサは、村の女性をある意味共感しえない「他者」として醜いとすらみえる姿で描写している。彼はさらに次のように記す。

八人の記者―私はそのうちの二人を知っていて、アマドール・ガルシアとは、彼がアヤクチョに旅立つほんの二、三日前一緒にいた―についての真相は、まるで、自分自身の国の新しい―恐ろしい―歴史を発見していくことのように思われた。だがその時でさえ、私が住んでいるのとは異なったペルーから、何世紀にもわたる忘却と逆境にもかかわらず、あの聖なる山々のなかで生き長らえてきた昔ながらの古いペルーから出て来たかと思われる、あの小柄な女性が踊ったりイラクサでわれわれの足を叩いたりするのを見ていた時の、あの黒い雲におおわれた夕暮れに感じたほどの大きな悲しみを、私はかつて一度も味わったことがない。あのかぼそい小柄な女は、間違いなく、石を投げ棍棒を振るった女たちの一人だ、というのはイキチャの女たちは、男と同じように好戦的なので有名だからだ。ビリー・レッド（筆者注　ウィリー・レット）が死後に残した写真では、最前列に女たちの姿が見える。恐怖と激怒のために変質してしまったあの共同体を思い描くことは、難しいことではなかった（バルガス＝リョサ 1990：1986）。

ガルシアに加え、記者たちのうち最年長で首都リマで活躍していたヨーロッパ系のセダノも、バルガス・リョサの知人でもあった。バルガス・リョサのウチュラハイ村の人々を視る眼差しには、この人々によって知人たちを殺害されたというプレテクストがあった。さらに、「わたしが住んでいるのとは異なったペルーから」「昔ながらの古いペルーから」という記述には、ウチュラハイ村の人々との間に存在していた「距離」―同時代的でありながら時間の流れによって布置されている―が示されている。この文章が、委員会による調査の報告書として書かれたものでなく、文学者による私的観察として巧みに表現されることで、逆に当時の首都リマの、ヨーロッパ系の人々のアンデスの先住民に向けた眼差しが照射される。この文章を読むことができる当時のペルーの識字者の多くにとって、アンデス世界を、そしてウチュラハイ村の

人々を、バルガス・リョサの目を通してみることは、つまり彼の立ち位置からみることは、その記述のポジショニングに気づかないほど自然なことであったと考えられる。

五．ウチュラハイ事件と裁判

ウチュラハイ事件をめぐる裁判には、捕らえられた三名がケチュア語話者であったことから通訳がつけられた。しかし、単純に法廷通訳をつければ言語の問題が解決するというわけではなかった。ケチュア語には標準ケチュア語が存在しない。たとえば日本語に関して、私たちは義務教育の下での「国語」教育を通じて共通語を学ぶ。国語に限らず、教科書や授業では共通語が使用される。このため、日本国内各地で方言が使用されていても意思の疎通が可能である。方言という概念自体も、標準語（共通語）が作られ、日本語が標準語と方言に分けられたことにより生まれている。しかしながら、ペルーのケチュア語には標準ケチュア語が存在せず、辞書や文法書も乏しいことから実際には通訳は困難を伴う。ケチュア語自体、もともとアンデス地域には多様な民族、言語が存在するなか、一五世紀前半に急速に地域で勢力を拡大したインカ帝国が公用語として使用し、その後も植民地支配の便宜のために使用されたことで広まった言語である。

加えてブレヒトが全体主義の抑圧された社会のもとでのユーモアやレトリックの発達に言及したように（ブレヒト 1981）、お互いがお互いを監視し合い密告が横行した紛争下で、様々な隠語やメタファーが生まれている。たとえばセンデロ・ルミノソのメンバーは、ケチュア語で「歩く人」を意味する「*puriq*」と呼ばれていたが、これは政府軍が車やヘリコプター等で村に来るのに対し、センデロ・ルミノソは徒歩で来るというリアリティを反映していた。内戦という文脈で新たに生み出された様々な隠語の意味を知らなければ、たとえケチュア語話者であっても通訳、翻訳が意味を構成することは難しかった。場合によっては意味の通じない非論理的なことをいう無知な「インディオ（*Indio*）」とみなされたり、あるいは理解しえない文化的相違というかたちでミスティフィケーション（mystification）される可能性があった。

ウチュラハイ事件をめぐる法廷通訳に関して、真実和解委員会の報告書には以下の記述がみられる。

> 「法廷通訳者エディルベルト・ララ（Edilberto Lara）は、ケチュア語とスペイン語の違いのため、十分な意味を構成する翻訳はできないと述べた（ウチュラハイ事件の裁判の記録 Fojas 3690）。同様に法廷通訳者であったクロドアルド・ソト・ルイス（Clodoaldo Soto Ruiz）は、聞く者にとって「文化的コンテストが全く異なっていたので」、ケチュア語をスペイン語に翻訳することも、またその逆も非常に困難であったと指摘する（ウチュラハイ事件裁判の記録 Fojas 3727）。法廷通訳者は、二人ともワマンガ大学[xiii]のケチュア語の教員であった」（CVR 2003：164）

ここではスペイン語とケチュア語の関係については言及されているが、ケチュア語内の多様性、そして当時センデロ・ルミノソの支配を受けていた農村部と、都市に住むケチュア語話者の文脈の相違は見落とされている。

真実和解委員会で調査に携わった人々によると、[xiv] ウチュラハイ事件の調査を行った真実和解委員会は、限られた時間しか裁判記録を閲覧することを許可されず、かつコピーをとることも許されなかった。それ故、重要と思われる箇所を音読してレコーダーに記録し、後から文字に起こすという方法をとった。以下はそのようにして得られた裁判記録の抜粋である。

検察官は三人の被告に有資格殺人の罪で二十五年間の懲役刑を求めていた。しかし、特別裁判所は、訴訟の開始から四年後の一九八七年三月九日にディオニシオ・モラレス・ペレス、マリアノ・ハサニ・ゴンサレス、シメオン・アウカトマ・キスペのそれぞれに十年、八年および六年の懲役という判決を下した、裁判所は、故意に犠牲者の苦しみを増す意図があったと裁判上みなすだけの材料はないと判断した。さらに犯罪や裁判歴がない半文盲の農民が「暴力が広がる状態のもとで、そのような二つの火のもとで」犯した罪を扱っているとした。しかし、他方で「半文明化され、隷属やアルコール依存の影響力の強弱はあれ、そのような影響下にある」とする（先住民に対する）刑法第四十五条の規定を適用することはできず、「創造的で能力を有し敬意に値する文化の枠組みの中にあるペルー人」として扱った。（CVR 2003：166-167）

この判決が出された後、記者の家族たちは控訴した。そして、裁判官がフェルナンド・ベラウンデ大統領と軍の最高司令官の責任を決定するよう求めた。この見直しは一九八八年六月十四日に判決を下した最高裁判所によって行われ、単純な殺人の罪で被告ディオシニオ・モラレス・ペレスとマリアノ・ハサニ・ゴンサレスの懲役刑を十五年に増やした。三人目の被告であるシメオン・アウカトマ・キスペに関しては、すでに六ヶ月前にルリガンチョ刑務所で、結核によって死亡していたため、判決は無効とされた。（CVR2003：168）

ここでは、裁判において容疑者たちを「先住民」として扱うか「一般のペルー人」として扱うかということが争点の一つとなっていたことが伺える。結果、判決は捕えられた三名を「先住民」として裁くのではなく、「ペルー人」として裁いたことが示される。しかし、他方で、事件が紛争下で起こったことも考慮されている。

記者の家族も一枚岩ではなかった。記者の家族のなかには、息子と同様に記者であったウィリー・レットの父、殺害された記者たちのうち最年少であったメンディビルの母[xv]に代表されるように、本当の殺害者はウチュラハイ村の人々ではなく政府軍である、もしくは軍がウチュラハイ村の人々に命じて実行させたと考える人々がいた。このため、

ベラウンデ大統領と政府軍の責任を追及することを求めた。しかし、ここには矛盾が存在する。もし記者たちを殺害したのが政府軍であれば、逮捕された村人たちは無罪であるか、少なくとも減刑されるはずである。しかし、政府軍の責任を問う記者の遺族が被告の村人たちの無罪や減刑を求めることはなかった。刑期が軽すぎると不満を表明した遺族もいた。

六．ケチュア語世界とスペイン語世界―非先住民の二人の女性

元村長は、当時ウチュラハイ村にあった小学校に勤務していた女性教員アンヘリカ[xvi]がセンデロ・ルミノソを支援していたと語っている。同様の証言は複数の村人たちから得ている。また、サンチェス兄弟も、オルグ活動に来たセンデロ・ルミノソのメンバーのマルティンが村で革命学校を開くにあたって、アンヘリカが村人たちに革命学校への参加を呼びかけたことを記している（Sanchez & Sanchez 2013: 112-113）。ウチュラハイ村にあった小学校の父母会の代表であった村人は次のように語っている。父母会の代表者は学校教員の出勤や鍵の管理もしていた。

> アンヘリカがアヤクチョ市に行くときは、テロリストたちが彼女の家に残るようになりました。村人たちは知らずに「先生の親戚だろうか」と言っていました。そして、アンヘリカが村にいない時はテロリストたちが学校で教えていました。（2004年筆者インタビュー、ケチュア語）

アンヘリカが裁判において果たした役割は重要であった。アヤクチョ市出身のアンヘリカは、先住民村であるウチュラハイ村において、唯一スペイン語を母語とし村落外から村に来て村に居住する非先住民、すなわちミスティであった。加えて法廷においてスペイン語で証言できる唯一人のウチュラハイ村居住者でもあったのである。事件が起こった時、アンヘリカは休暇中で村にはいなかった。

アンヘリカは裁判で、村では一度もセンデロ・ルミノソのメンバーをみたことはなかったと証言している。彼女はマスメディアにも同様に語った。真実和解委員会による調査及び筆者による調査では、村には一九八一年頃からマルティンというコマンド名のセンデロ・ルミノソのメンバーが、当初は商人を装って訪れはじめている。その後、村人のなかにもセンデロ・ルミノソに加わる人々が現れた。

アンヘリカは村へのセンデロ・ルミノソの侵入を否定しただけでなく、村長が銃を手に持つ写真を提示している。そして、記者たちの殺害における政府軍の関与を示唆した。これは殺害された記者の家族、記者たちの一部、左翼系の人々が、八名の記者を殺害したのはウチュラハイ村の人々ではなく、政府軍であるとする主張を支持するのに寄与した。しかし、サンチェス兄弟によると、事件が起こる前、十二月末に村に政府軍が二機のヘリコプターできて五日間滞在した。軍は村の役職者と会合するとともに、村の若者たちにセンデロ・ルミノソと

闘うための軍事訓練をしている（Sanchez&Sanchez 2013：121-123）。それ故、村長が銃を持つ写真が存在することは矛盾せず、かつその写真が記者たちの殺害に政府軍が直接関与したことの証拠にはならない。

もう一人の重要な人物は、インファンテの異父妹であり、アルグメドの妹にあたるマルタ（仮名）[xvii]である。マルタはケチュア語とスペイン語のバイリンガルである。筆者の調査では、当時、アルグメドやマルタが住むチャカバンバはすでにセンデロ・ルミノソの影響下にあった。そして、そのことは地域の人々の間では知られていた。アルグメドがセンデロ・ルミノソと関係があったかどうかはわからない。これについては、アルグメドはすでに地域でセンデロ・ルミノソのメンバーとして知られていたという説と、アルグメドがセンデロと関係があったかどうかはわからないという説に分かれる。しかし、マルタに関してはセンデロ・ルミノソとの関わりが語られている。それだけではない。五月の十字架の祭と七月の聖カルメンの祭りの際のセンデロ・ルミノソによる襲撃では、村人たちのなかから記者たち（及びアルグメ）の殺害に加わった人々が選別され殺害されている。襲撃したセンデロ・ルミノソのメンバーたちのなかにマルタの姿があったことを、襲撃を生き延びた複数の村人たちが目撃している。

一九八三年五月十七日、エスピリトゥ・サントの日の早朝五時にセンデロ（・ルミノソ）がやって来て、家々を燃やしました。カルロス（仮名、センデロ・ルミノソの仲間となったウチュラハイ村の村人）がしたことです。アルグメドの妹のマルタ（仮名）も赤いパンタロンを履いて兄弟の復讐に来ました。一九八四年には政府軍や警察（リンセlince）が来ました。ヘリコプターできて人々を殺害し、家畜を奪いました。ヘリコプターで旋回し、人々を連れて行きました。そして爆弾を落とし、家畜を殺して奪いました。（筆者によるインタビュー二〇〇四年ケチュア語）

センデロ・ルミノソが、なぜ記者たちの殺害に関与した人々とそうでない人々を正確に選別することができたのか。一つはウチュラハイ村の村人のなかにセンデロ・ルミノソに加わった人々がいたことがあげられる。もう一つは、センデロ・ルミノソの襲撃にマルタが加わっていたことがある。マルタは兄たちを殺害し、さらに自分や母、義姉を捕まえて不当な扱いをしたウチュラハイ村の人々への復讐を遂げた。その後マルタはアヤクチョ市に移住し、アンデスの民謡ワイノの歌手となった。「ウチュラハイの殉教者（Martires de Uchuraccay）」というタイトルで、亡くなった記者たちとアルグメドを歌った曲を含むワイノのカセットを発売している[xviii]（**写真11**）。

元村長のモラレス、元アルカルデのアウカトマが連行されたときには、実際に殺害に参加した人々はすでに村から姿を消していた。殺害に関与したことで身の危険を感じ村から逃げた村人にも、センデロ・ルミノソの追及の手は及んだ。記者たちの殺害において重要な役割を果たしたと考えられるテニエンテ・ゴベルナドールは、事件の後村か

ら逃げ身を隠していたが、別の場所で、遺体となって発見されている。

テニエンテ・ゴベルダドールであったフォルトゥナート・ガビランはセルバに逃げようとしたが、一九八三年八月二日、「ペルー共産党―センデロ・ルミノソ」に、タンボーアヤクチョ間の街道から四十八キロメートルに位置するタウタカ（Tacctaca）で殺害された。遺体の上には、「フォルトゥナート・ガビラン、ウチュラハイ村の「黒い頭（cabeza negra）」、ゲリラ、農民、八名のジャーナリストの殺害者。ベラウンデ（大統領名）の追従者である人民の裏切り者はこのように死ぬ」と書かれたビラが置かれていた（CVR 2003:145）

「黒い頭」は、センデロ・ルミノソが、政府軍や警察、またこれら国家機関の側についた人々、反センデロ・ルミノソの立場をとる人々に対して用いた言葉である。

以上みてきたように、センデロ・ルミノソを支援した非先住民の小学校教員は、自らとセンデロ・ルミノソの関係を隠蔽するために、村へのセンデロ・ルミノソの侵入を否定し、裁判や記者たちの遺族、マスメディアを攪乱した。記者の遺族の一人は、センデロ・ルミノソの手を借りて殺害に関与した人々への復讐を成し遂げた。それにもかかわらず、記者の殺害には関与していなかった三名が逮捕され、記者たちの殺害に関与した人々はすでに亡くなり、しかも殺害の舞台となった村自体が消滅し村人たちは国内避難民となるなかで、長期にわたって裁判が続けられ、結果として三名の村人に有罪判決が下されたのである。

記者と遺族たちの多様性も重要である。殺害された記者たちはアヤクチョをはじめとする山岳部出身の者もいればリマ出身の者もおり、その人種的、社会的背景は様々である。ヨーロッパ系で高等教育を受けており、リマ在住で、アンデス（先住民）世界を知らない記者の遺族もいれば、山岳部のアンデス地域出身で、ケチュア語とスペイン語のバイリンガルのメスティソの遺族もいる。

マルタは誰が記者たちとアルグメドの殺害に関わったのかを把握していたが、そのことを他の遺族たちと共有することはなかった。[xix] 記者の遺族たちのなかに、被告となった村人三名により重い罪を望んだ人々もいた。筆者によるリマ在住のウィリー・レットの父とメンディヴルの母[xx]へのインタビュー（二〇〇二年）では、二人は記者たちの殺害には政府軍の関与があったとみており、「正義」を求め続けていた。メンディヴルの母は人権運動の象徴にもなり海外にも講演に招かれている。しかし、先述のように殺害の真犯人は村人ではなく政府軍であるとするならば、記者たちの死の責任は政府及び政府軍にあり、村人を有罪とし刑を科す必要はなかったはずである。毎年、事件が起こった日には記者たちや遺族がウチュラハイ村を訪れ、記者たちの栄誉を称える式典が開催される。記者たちを殺害したのは政府軍であるとみなす人々も依然として存在する。二〇一〇年には政府及び政府軍の責任を問うために米州人権裁判所への提訴が行われている。

七．おわりに

バルガス・リョサは、ウチュラハイ村の人々がセンデロ・ルミノソと闘うために銃を望んだことについて、次のように記している。

彼らは〈無知な者たち〉だった。あの三月十四日に、ウチュラハイ近辺の人々が心配していたのは、過去ではなく未来、つまり、〈センデリスタ〉のことだった。われわれを守りに来てくれるように、〈スィンチス〉に頼もうか？少なくとも三挺の小銃を送ってくれるよう、〈政府さん〉に頼もうか？集会が始まったとき、私は委員会に助言者と加わっていた人類学者の忠告に従って、地面に焼酎を撒き、彼等の守護神、ラスウィルカに敬意を表して飲み、コカの葉を分け与え、通訳を通して、われわれを取り囲んだ何百人もの共同体の人々に、ペルーの法律は殺人を禁じており、刑を科したり裁いたりするために裁判官がおり、法律を履行されるためには当局があることを説明しようと努めた。（バルガス＝リョサ 1990:1083-84）

ラスウィルカ山は、植民地時代の記録にも残るインカ時代以前から崇拝されてきている聖なる山である。人々は神の山を守護神として酒、コカの葉、煙草を捧げる。しかし、山の神との関係は各世帯単位で結ばれているため（細谷 1997）、ラスウィルカ山は必ずしも村人共通の神ではなかった。

村人たちは無知であったのだろうか？アメリカ人ジャーナリストが提供した調査時のインタビューの録音には、村人たちが懐中電灯を望んだことも記録されている。センデロ・ルミノソによる襲撃が夜間におこなわれていたためである。センデロ・ルミノソはケチュア語で「夜歩く人々（tuta puriqkuna）」とも呼ばれていた。バルガス・リョサが村に調査に来てから数カ月後に起こったことについて、ある村人は次のように語っている。

マルタ（仮名　インファンテとアルグメドの妹）がテロリストたちを連れて来ました。夜中の十二時か一時頃にウチュラハイ村を襲撃し、明け方の六時頃に帰って行きました。村の人々は石を持って戦いましたが、テロリストたちはウチュラハイ村の自警団を石がなくなるまで攻撃し、石がなくなると人々を殺し始めました。六十人から七十人くらいのテロリストたちが来ました。マルタが引き連れてきたテロリストたちが、次々に人々を殺していきました。男性も女性も子供も殺されました。テロリストたちは誰が記者たちの殺害に加わったか知っていて、「彼らは（記者たちとアルグメドを）殺した」と言い、殺害に参加した罪のある大人、若者を選び出し山に連れて行って殺しました。殺害に加わらなかった人々は別にされました。記者たちとアルグメドの殺害に加わった人々だけが山に連れて行かれ殺されました。そして、村に火を放ち燃やしました。（筆者によるインタビュー、二〇〇四年、ケチュア語）

ウチュラハイ村の人々は銃やダイナマイトで武装し襲撃してきたセンデロ・ルミノソと飛礫やオンダ（honda 投石具）で闘い、法や当局による保護もないまま殺害されていった。それどころか、政府軍による虐殺もおこなわれた。

元村長のオーラル・ヒストリーを核とする分析を通じて明らかになったことは、ペルー社会に内在するケチュア語世界とスペイン語世界の間にいかに大きな距離が存在し、またそれが紛争中及び紛争後を通じて操作されてきたかという点である。村人たちの死に直接的、間接的に関わった二人の非先住民女性はスペイン語世界の側に行くことで、物理的だけでなく過去という時間に関しても距離をおくことが可能になった。他方で、ケチュア語話者の人々は、ガヤトリ・スピヴァクが『サバルタンは語ることができるか』（スピヴァク 1998）で問うたように、言葉を届けることができないまま、スペイン語の世界から排除されてきた。

社会学者ブルデューは次のように論じる。

> 社会的主体が社会界を実践的に知るために活用する認識構造は、身体化された社会構造である。つまり社会界の中で「理にかなった」行動をするために前提とされるこの社会界についての実践的知識は、もろもろの分類図式（中略）、すなわち種々の階級（年齢階層、性別階層、社会階級）への客観的分割の産物であり意識と言説の手前で機能する歴史的な知覚・評価図式を、活用するのだ。これらの分割原理はある社会の基本構造が身体化された結果生まれたものなので、その社会のあらゆる行為者たちに共通であり、したがって共通で意味のある世界、共通の意味（サンス・コマン）［常識］の世界を生産できるようにしてくれるのである（ブルデュー 1990:340）。

ブルデューは「階級」という言葉を経済的階級に限定されない広義で使用している。社会にはブルデューがいうところの「階級」が存在し、ペルー社会においてバルガス・リョサが所属する「階級」と先住民の人々が所属する「階級」は異なっていた。加えて、紛争という局面において、当時のペルー社会では「階級」によって経験している現実が異なっていた。先住民地域ではすでにセンデロ・ルミノソによるテロ活動がはじまっており、村人たちの殺害がおこなわれていた。ウチュラハイ村の人々は軍が介入し大規模な虐殺と内戦がはじまる入り口にいた。一方、バルガス・リョサが所属する「階級」の人々の居住区で、センデロ・ルミノソによる本格的なテロ攻撃がはじまったのはその約九年後、一九九二年のことであった。

社会界をめぐる認識構造においては、どれが「共通の意味［常識］の世界を生産」するかという選択がおこなわれている。しかしながら、選択の場において権力関係、序列化が作用することで、選択自体が選択というプロセスが介在していないがごとく自明で「正しい」こととなる。

オーラル・ヒストリーという観点からみると、事件をめぐる言説は、出来事とのそれぞれの関係性に規定される。人々が出来事をどのように経験するかということは、人々のそれまでの経験と関係し、その文脈に順応したかたちで立ち現れ経験される（ホワイトヘッド 1996）。真実委員会においてはそのときそこで何が起こったかという「真実」が追及されるが、しかしそもそも「真実」とは何であろうか。その時、その現場にいた人々にとっての真実と、その後俯瞰的にみることができるようになってからの真実は必ずしも同じではない。必要なのは唯一の真実の存在を前提とすることよりも、人々がその出来事をどのように経験したかという点及び語り（証言）の位置（ポジション）に注目していくことであろう。本稿で示されたように、ウチュラハイ事件は、どの位置からみるかによって、まるでカレイドスコープを覗きこむかのように異なる姿で立ち現れる。元村長の語りに基軸をおくと、これまでスペイン語世界で語られてきた世界、またバルガス・リョサが記した世界とは異なる世界が現れてくる。

最後に、村では実際に事件を経験した人々の高齢化が進みすでに亡くなられた方もいる。世代交代が進むなか、大学教育を受けた若者も生まれている。『記憶の場』シリーズを編集出版したピエール・ノラは、記憶を直接的記憶と間接的記憶に分ける（ノラ 2002）。筆者が別論文で非識字者社会における口頭伝承と間テクスト性の関係について論じたように（細谷 2008, Hosoya 2009）、村の人々が真実和解委員会やその後に出た様々な記事や文献、映像、SNS 等を目にすることによって、それらが新たな世代の事件の認識に影響を与え再記憶化され間接記憶を構成していくことが予測される。ウチュラハイ事件をめぐるドキュメンタリーの制作も進行中である。本稿を含めウチュラハイ事件に関する広義のテクストは引き続きあらわれ、再生産されていくであろう。往々にして公的歴史に包摂されにくい非識字者の記憶をいかに歴史の中に包摂していくか。言語間のヒエラルキーの障壁を越える非識字者のオーラル・ヒストリーの記録は、社会に内在する権力関係によって、出来事や記憶が消去（デリート）されていくことに抗する方途でもある（写真12）。

【謝辞】

本稿のもととなる調査研究には、JSPS 科研費 JP13372002, JP22401043, JP18K01176, JP18H03453 の助成を受けました。記して感謝いたします。調査にあたっては様々な方々の支援をうけました。なかでも、ウチュラハイ村の人々、民俗芸術家のエディルベルト・ヒメネスさん、考古学者兼カトリック大学のケチュア語教員のカルメン・カソルラ・センさんには筆者の疑問に真摯に御対応いただきケチュア語翻訳にご協力をいただいたことに深謝いたします。また、本稿執筆中の二〇二〇年八月にクスコ大学名誉教授のホルヘ・フローレス・オチョア博士、クスコ市長のリカルド・バルデラマ博士、メキシコ国立人類学歴史学大学名誉教授のリカルド・メルガル・バオ博士が新型コロナウイルスにより相次いで亡くなられました。アンデス研究に多大なる

貢献をされてきた、そして学恩ある先生方に感謝の念とともに心より哀悼の意を捧げます。

---

i　主なものとしてComisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay 1983, Mayer 1992, 2012, Hosoya 2003, CVR2003, Theidon & Peratta 2003, Montoya2005, 細谷2005,2013 , Sanchez&Sanchez 2015, Krajnik 2018

ii　リカルド・バルデラマ教授はクスコ市長となり、新型コロナウイルスが拡大するなか対策に心血を注いでおられたが、自らも感染され二〇二〇年八月三十一日に逝去された。お二人にはクスコでフィールドワークをしていた際にお会いし、ケチュアの世界に深く入り込み真摯にかつ誠実に向き合っていらっしゃる御研究に深い敬意を抱いてきた。シャイで温厚なお人柄が偲ばれる。

iii　"Shougun（将軍）"は、センデロ・ルミノソの少年兵となっていたガビランの命を救い、面倒を見た政府軍の司令官の通名。ガビラン氏によるとその後「将軍」に会うことがかなわず生死もわからずにいる（二〇一九年八月筆者インタビュー）。

iv　ヨーロッパ系と先住民の混血を意味するが、単純に血統や外見の特徴だけでなく、使用言語、教育、地位、富など、様々な要素から総合的にカテゴリー化がおこなわれる。また、特定の個人が、場所（社会）やライフコースのなかで先住民と分類されたり、メスティソと分類されることもある。ちなみにスペイン語は女性名詞と男性名詞があり、女性の場合はメスティサ(mestiza)、男性の場合はメスティソ（mestizo)、男女混交する場合はメスティソス（mestizos）となる。ここでは、暫定的にメスティソと記す。他の性別が関わる単語についても同様である。

v　車爆弾の攻撃を受けたことで知られるミラ・フローレス区のタラタは、当時クスコでフィールドワークをしていた筆者が首都リマに行ったときに滞在ていた家に近く、時々買い物に行っていたスーパーマーケットの裏であった。

vi　日本では現在二重国籍は法的に認められていないが、フジモリが生誕した当時は二重国籍が可能であった。

vii　キューバ革命後キューバを去り、革命を続けたチェ・ゲバラは隣国ボリビアで殺害されている。

viii　記者たちがウチュラハイ村を通ろうとした日の朝、村の若者が告発され供出された酒をテニエンテ・ゴベルナドールたちが飲んでいた件については、Hosoya2003、また、真実和解委員会の最終報告書（CVR2003）、Sanchez&Sanchez（2015）にも記載されている。

ix　農民の自警団に反政府組織から自衛し闘うための銃が配布されたのはフジモリ政権になってからである。

x　ただし、元村長が記者たちの殺害後捕らえられた後殺害されたアルグメドとミゲルの死にも関わっていなかったかは不明である。しかし、裁判では記者の殺害が扱われている。

xi　数字が独り歩きしないために補足しておくと、真実和解委員会による調査当時の村長によると、真実和解委員会の最終報告書に記載された死亡した村人の名前は、真実和解委員会の要請により、村会で死亡もしくは行方不明となった村人の名前をあげてもらいそのリストを委員会に提出している。しかし、再建された村に帰還しなかった人々やその家族がおり、また家族全員が亡くなった例もあるので、これはあくまで委員会が把握した範囲の数である。

xii　「アヤクーチョ」→アヤクチョ（スペイン語の長母音の表記による）。「センデリスタ」はセンデロのメンバーのこと。「スィンチス」→シンチス（sinchis）はもともとは反政府組織鎮圧のための特別組織を意味したが、この文脈では政府軍を意味する。

xiii　グスマンが教授を務めていた、アヤクチョ市にある国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学のこと。

xiv　筆者インタビュー。

xv　メンディビルの母は、息子がアヤクチョの山岳部に取材に行くことを知り、前日にウイリー・レットの父に電話をして、息子のことを頼んでいる。筆者インタビュー。

xvi　筆者は二〇〇六年にアンヘリカ及びアンヘリカの親戚にインタビューをおこなっている（スペイン語）。アンヘリカの家族（夫、娘）がいたので、センデロ・ルミノソとの関係について質問することは控えたが、本人の口からセンデロ・ルミノソとの関係が語られることはなかった。他方で、彼女は裁判での証言と同様に、事件が起こるまで村ではセンデロ・ルミノソのメンバーを見かけたことはなかったと語った。アンヘリカはシングル・マザーであったが、事件後に同じく教員をしていた現在の夫と知り合い結婚している。アンヘリカの夫はアンヘリカの過去について知らない様子であった。アンヘリカがウチュラハイ村の教員になるまでの経緯については、Sanchez&Sanchez 2015に詳しい。

xvii　マルタの名は、ウチュラハイ事件調査委員会の報告書、および真実和解委員会の最終報告書等に実名で記されているが、ここでは仮名とする。

xviii　筆者は二〇〇六年にマルタにインタビューをしたが（スペイン語）、本人がセンデロ・ルミノソとの関係や過去について語ることはなかった。マルタの過去については知らない様子の夫も同席していたので、マルタにセンデロ・ルミノソとの関係について問うことはしなかった。

また、筆者はチャカバンバに戻り一人で住んでいたマルタたちの母にも二〇〇六年にインタビューをした（ケチュア語）。マルタの母は、息子たちの死については語ったが、マルタとセンデロ・ルミノソの関係については語らなかった。本当に知らないのか、あるいはマルタとセンデロ・ルミノソの関係やマルタがウチュラハイ村の人々を虐殺し復讐をしたことを知っていても語らないのかわからなかったが、二人の息子を喪った高齢の彼女に尋ねることはしなかった。彼女は二〇二〇年八月十二日にアヤクチョ市で逝去した。

xix　甥にあたるインファンテの息子は、センデロ・ルミノソのメンバーの容疑でエル・フロントン島にあった刑務所に収監されていた。しかし、ペルージャーナリスト協会が殉教者とみなすインファンテの息子であったことから、同協会の尽力により、エル・フロントン島で起こった囚人の暴動を政府が武力制圧して多くの囚人が殺害された事件の直前に釈放され命拾いしている。

xx　メンディビルの母 Gloria Trelles de Mendivil さんは、二〇一九年四月二十四日に八十七歳で逝去している。

xxi　「記憶の場、寛容と社会的包摂」博物館におけるウチュラハイ事件をめぐる展示。バルガス・リョサ委員会によるウチュラハイ村での調査時に録音された村人たちとの会話を聞くことができる。

参照文献

スピヴァク、ガヤトリC.

1998 『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳　みすず書房

ノラ、ピエール

2002 『記憶の場―フランス国民意識の文化＝社会史〈第1巻〉対立』岩波書店

バルガス＝リョサ、M

1990 「ある虐殺の真相」桑名一博訳　集英社ギャラリー［世界の文学］19『ラテンアメリカ』pp.1059-1088　東京：集英社

ブルデュー、ピエール

1990 『ディスタンクシオンⅡ』石井洋一郎訳　藤原書店

ブレヒト、ベルトルト

1981 『亡命者の対話』（ブレヒト・コレクション 4）野村修翻訳　東京：晶文社

細谷広美

1997 「アンデスの女性―高地の村に暮らすインディオの女性たち」綾部恒雄編『女の民族誌2欧・米・中東・アフリカ・オセアニア篇』pp.195-220 東京：弘文堂

2005 「歴史とポストコロニアル：ペルーウチュラハイ村事件と先住民族のテロ経験」『現代ペルーの社会変動』村上勇介編 JCAS連携研究成果報告7 pp.53-89

2008 「インカ表象と間テクスト性―歴史、記憶、イデオロギー」関雄二、染田秀藤編『他者の帝国：インカはいかにして「帝国」となったか』pp.301-324 京都：世界思想社

2013 「人権のグローバル化と先住民：ペルーにおける紛争、真実委員会、平和構築」『文化人類学』77巻4号 pp.566-587

ホワイトヘッド、A. N.

1996 『象徴作用他』市井三郎訳　河出書房新社

Agüero , José Carlos

2015 Los rendidos: sobre el don de perdonar. Lima:Instituto de Estudios Peruanos

Gavilán Sánchez, Lurgio

2012 (2017) Memorias de un soldado desconocido. Lima:Instituto de Estudios Peruanos.

2019 Carta al Teniente Shogun. Lima:Debate

Hiomi Hosoya

2003 *La memoria post-colonial : tiempo, espacio y discursos sobre los sucesos de Uchuraccay*. Lima:Instituto de Estudios Peruanos

2009 “La representación de lo inca y su intertextualidad: Historia, memoria e ideología” Hidehuji Someda, Yuji Seki (eds.) *Miradas al Tahuantinsuyo : aproximaciones de peruanistas japoneses al imperio de los Incas*. Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial. pp.189-208

Isbell, Billie Jean

1985 (1978) *To Defend Ourselves: Ecology and Ritual in an Andean Village*. Illinois: Waveland Press Inc.

Krajnik, Franz

2018 *Uchuraccay*. Lima :Editorial UPC.

Mayer, Enrique

1992 “Peru in Deep Trouble Mario Vargas Llosa’s ‘Inquest in the Andes’ Reexamined.” In *Rethinking Cultural Anthropology*, G. Marcus (ed.), pp.181-129. Durham: Duke University Press.

2012 Uchuraccay el Peru profundo de Mario Vargas Llosa. Carlos Iván Degregori, Pablo F. Sendón and Pablo Sandoval (eds.),No hay pais más diverso:Compendio de antropología peruana. pp.146-199, Lima:Instituto de Estudios Peruanos

Montoya, Rojas Rodrigo 2005 *Elogio de la antropologia*. Lima:Instituto Nacional de la Cultura.

Valderrama, Ricardo Fernandez &Carmen Escalante Gutierrez

1979 *Gregorio Condori Mamani: Autobiografia*. Cusco:Centro de Estudios Rurales

Andino
Theidon, Kimberly & Enver Quinteros Peratta
2003　Uchuraccay:La politicade la muerte en el Perú. Idéele No.152:27-31.
Vargas Llosa, Mario et al.
1983　*Informe de la Comisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay*. Lima: Editora Perú
Víctor Tipe Sánchez, Jaime Tipe Sánchez
2015　*Uchuraccay, el pueblo donde morían los que llegaban a pie*. Lima：G7 Editores

〈資料〉

Comisión Investigadora de los Sucesos de Uchuraccay 1983
Comisión de la Verdad y Reconciliación (CVR) 2003

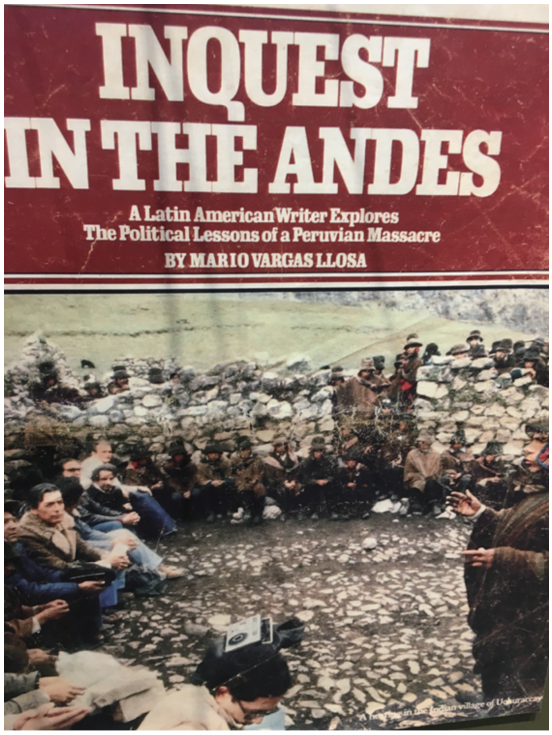

写真1　ウチュラハイ村で調査するバルガス＝リョサ、1983年2月11日。The New York Times Magazine1983年7月31日　El Lugar de la Memori, la Tolerancia y la Inclusión Social：LUM（「記憶の場：寛容と社会的包摂」博物館）（リマ）の展示。

写真2　ジャーナリストたちが殺害された場所、遺族たちによって十字架がたてられた（筆者撮影）

写真3　記者たちを顕彰するウチュラハイの公園「平和と和解の聖地」（筆者撮影）

写真4　「彼らは真実のために死した、我々は真実のために闘おう」（国際ジャーナリスト協会、ペルージャーナリスト協会）（筆者撮影）

写真5　下写真。ウチュラハイ村で殺害された記者たち（ワイチャオ村に向かう途中、写真に写っていないオクタビオ・インファンテが撮影したと考えられる。LUMの展示

写真6　海軍の基地が建設された後、現在は再度スタジアムとなっている。山の向こう側の高地にウチュラハイ村を含む先住民村が散在していた。紛争中は廃墟となった村も少なくなく、多くの人々が国内避難民となった。（筆者撮影）

写真7　スタジアムに建設された海軍施設で多くの人々が行方不明になった。紛争後再建されたスタジアムに軍施設で拷問がおこなわれていたことを示す壁画が描かれた。（筆者撮影）

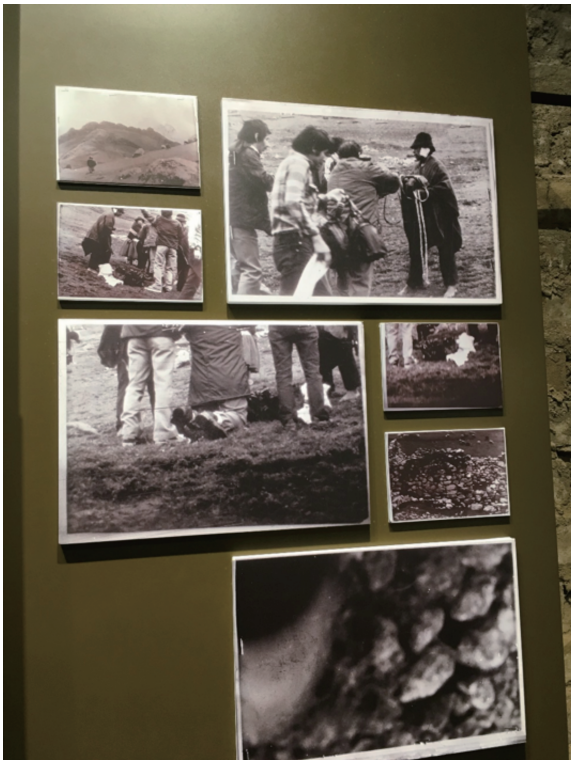

写真8　ウィリー・レットが撮影した写真。LUMの展示。

写真9　裁判（バルガス・リョサ）LUMの展示。

写真10　ウチュラハイ村のコルタモンテ（Cortamonte：カーニバルの頃におこなわれる様々な品を吊るした木を切る遊び、ユンサYunzaともいう）でイラクサを手に踊る人々（2002年）。右端筆者。

写真11　LUMにはマルタ（仮名）が殉教者としての兄たちを歌ったワイノのカセットが展示されている。LUMの展示。

写真12　海抜4000m近い高地の学校でサッカーをして遊ぶ子どもたち（筆者撮影）